銀河戦国群雄伝12
ライ
真鍋譲治
Dengeki Comics EX
銀河戦国群雄伝ライ
12
真鍋譲治
DE-5-12

9784073037811

1910979009500

ISBN4-07-303781-1

C0979 P950E

発行●メディアワークス 発売●主婦の友社 定価950円(本体922円)

DENGEKI COMICS EX

フォーチュン・クエスト①②
迎 夏生 COMIC 深沢美潮 STORY

エンジェルアーム①〜⑦
衣谷 遊

ダンジョン・マスター
菱橋伸祐

央華封神①②
菱橋伸祐 原案 友野 詳

電撃摩陀羅海賊本①
田島昭宇原作
with MADARA PROJECT

MADARA赤LASA①〜③
田島昭宇

MADARA壱①〜④
田島昭宇

MADARA転生編
田島昭宇with MADARA PROJECT

MADARA外伝
死海のギルガメシュ
花津美子with MADARA PROJECT

幼稚園戦記まだら①〜③
最見依久with MADARA PROJECT

聖痕のジョカ①〜③
大塚英志原作 相川 有作画

銀河戦国群雄伝ライ①〜⑫
真鍋譲治

イース⑤〜⑦
羽衣 翔

電撃丸①
衣谷 遊・夢来鳥ねむ・MEIMU他

KISS
MEIMU・今関あきよし・大嶋拓
COMIC STORY WORDS

緋翔伝幾千の月のかけら①〜⑤
夢来鳥ねむ

魔狼王烈風伝①〜④
沢田 翔

メビウスクライン⓪
麻宮騎亜

卒業〜グラデュエーション〜コミック傑作選
内野文吾他

卒業〜グラデュエーション〜
HAVE A GOOD DAY
真行寺たつや

ダークマドンナ
黄保 宏原作 柴田文明作画

外伝・侍魂
山本よしふみ・矢上裕他

サムライスピリッツ
覇王丸地獄行
しろー大野

真サムライスピリッツ
覇王丸地獄変
しろー大野

しろー駄作劇場
しろー大野

ネオジオコミック海賊本
しろー大野

大江戸裏ワールド
中野 景

がんばれ!プリンセスちゃん
ひくちきみこ

ガンドライバー①
ピトウ ゴウ原作
せたのりやす作画

リスティス①
うたたねひろゆき

最終機攻兵メタルスレイダー
グローリーエイミアの面影①
☆よしみる

エメラルドドラゴン
4コマギャグ Bomb!
夢来鳥ねむ・相川 有他

星刻の騎士
スターズ・オブ・サミュール
羽衣 翔 ORG 原案

スタービンキーQ①
只野和子 眠田直原作

ローティスなあじゃ
おおのやすゆき

放浪見聞録①
島田英次郎

銀河戦国群雄伝ライ

12

真鍋譲治

DE-5-12
発行
メディアワークス
発売
主婦の友社

DengekiComics

RAI

BY JOJI MANABE

12

銀河戦国群雄伝

ライ

●ARTIST
JOJI MANABE

●EDITOR
SAEMI MIYA
ANRI KOMATSU

●BOOK DESIGN
TETSUYA ASAKURA

●SPECIAL THANKS TO
MASAHIKO YAMASHITA
YOSHIKI MORISHITA
TOSHIMICHI OKITA
SHINICHI YAMAGUCHI
HIRONORI NAGAI

戦国の銀河を生き抜く群雄たち

【竜我雷】りゅうがらい

本編の主人公。その度胸と悪運の強さを狼刃に買われて一兵卒より師団長に抜擢され、五丈軍先鋒として南天に雪崩込む。南天軍の前線を突破するや、大暴れして要衝座王郡に一番乗りを果し、その勇名は敵味方に響き渡る。その後も、数々の戦功により、昇進に昇進を重ね、骸羅のクーデター時には、南京楼の大守に収まっていた。初めて地盤を得た雷は、その地で希代の天才、師真を自軍に軍師として迎え、また、皇室の娘紫紋を妻に迎えるや、すぐさま中央に反旗を翻し、挙兵する。圧倒的に不利な状況の中、激戦を展開、ついに金州海にて、恩師狼刃を涙をふるって倒した。その余勢を駆って、まもなく全五丈を平らげる。

【雲海入道】うんかいにゅうどう

雷の長年の戦友。かつては高僧に使える身分でもあったが大酒飲みが仇で宗門を追われた破戒坊主。だが、雷にとっては最も頼りになる豪傑である。終始、雷と行動を共にし、右腕として活躍する。雷の密命を受け、暴政下の武王都に残り、麗羅の保護を依頼され、その身柄を無事雷の元に届けた。

【太助】たすけ

雷と同郷であり、幼い頃から雷を兄として慕う。その小さな体に似合わず、雲海と共に各戦場を転戦、修羅場をくぐり抜けた強者でもある。この度の偽帝討伐戦においては、帝都斉王都奥深く潜り込み、師真と図って、敵謀将骸延の失脚を画策するなど身軽さを生かした活躍が光る。

【大覚屋師真】だいがくやしし

南京楼の豪商大覚屋の放蕩息子。普段は酒色に溺れ、甚だ評判が悪い。だが、その知謀たるや史書、経書から兵法、天文、医学に精通した天才的な戦略家である。自分自身もその知謀で天下を動かすことを夢み、並みいる諸侯からの度重なる招きを全て固辞し、時を待つ。やがて、その南京楼に雷が赴任、紫紋に横恋慕した師真は、城に出入りし、次第に雷に傾倒していく。雷挙兵時には、軍師としてその才覚を余すことなく発揮、劣勢下の南京楼軍を勝利に導く。

【紫紋】しもん

敗将阿曹主禅の一人娘。皇室の血を引く唯一人の王女故に、悲しい運命にもて遊ばれる悲劇の娘である。実の父阿曹主禅を雷に殺され、五丈に身柄を引き取られ、恩賞として敵でもある雷の元に預けられる。だが、雷とはそれを乗り越え深い愛情を寄せ合う。その後も、雷を陰日向に支えていく気丈な娘である。

【麗羅】れいら

男勝りの五丈の王女。弾正という強大な権力を背景に我がまま放題である。雷には興味を持ち、紫紋とよく対立し、反乱の罪をかぶせて殺そうとした事もある。弾正の死後、骸羅と結び、五丈を乗っ取る。その後、国を追われ、雷の命を受けた雲海に保護され、雷の元に落ち着く。

【簡々】らんらん

華王の妹。共に李張の元で学ぶ。道士としての能力は未知数だが、今は紫紋の元で身の回りの世話をしている。幼い割にはしっかりしていて、荒くれ者の印象がある雷の元に嫁ぐ紫紋の身を案じていたが、今では雷を少し見直したようである。

【孟閣】もうかく

冷静で勇猛な闘将で、南征以後、常に副官として経験不足の雷を適切に補佐する。歴戦の強者であり、その豊富な戦歴に裏打ちされた知識を基に、よく雷を助け、軍事部門の責任者として、その覇業に重きをなす。

【三楽斎】さんらくさい

南京楼軍の武将。主人運が無く、自分の出世のために各赴任地を転々とする。その処世術のために孟閣らにはよく思われていないが、

彼自身極めて有能な官僚であり、弁舌の才をもって雷を補佐し、外交、内政面において活躍する、能吏派軍人。

【鐘士元】しょうしげん

南京楼軍の武将。雷の師団長時代以来の宿将。勇猛果敢、常に先鋒を受け持ったが、師真の様な新参者とは反りが合わず、常に対立するが、初戦において師真の知謀を認め、その指揮下に入り、金州海の決戦に於いては顕著な活躍をする。

【姚文】ようぶん

南京楼軍の武将。鐘士元等と共に雷の股肱の臣である。やはり師真とは合わなかったが、その命には逆らわず、

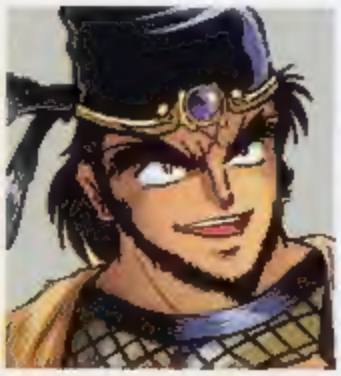
よく戦い、骸羅討伐の前哨戦を勝利に導く。その後も、金州海や各地の戦いに於いて戦功を上げ、雷の五丈平定を助ける。

【項馬】こうえん

南京楼軍の勇将。南天との国境近くに根拠を持ち、部下二千を従える大海賊。やがて雷の度量の大きさに感服して一族郎党共々帰順、齢七十になんなんとするが、水を得た魚のように活躍する。

【項武】こうぶ

項馬の息子で怪力無双の暴れ者。八十斤はあろう大斧を片手で軽く振り回す豪傑である。父と共に雷に帰順し、その武勇を買われ、常に先鋒を任される。多分に深慮遠謀が欠けるところもあったが、敵味方共に認める、千軍万馬の強者である。



【林則嘉】りんそくか

南京楼軍の謀臣。若い頃は風采も上がらず誰にも相手にされずにいたが、城内に出入りしている間に師真に見出され、雷輔翼の人物として師真と双璧をなす。天才肌の師真に対して、地味ながらその誠実さを持って数々の献策をし、雷の地盤の発展を図る。特に金州海の決戦に於いて逸る雷を諫めたのは特筆される。だが師真の唱える「覇」には疑問を持つ。

【大覚屋英真】だいがくやえいしん

師真の四つ下の弟で、大覚屋の跡取り。兄師真のような縦横無尽な才略には欠けるものの、その思慮深く、篤実な性格の人となりで、多くの人に一目置かれた。雷の財政面での助言者である。

【如晦】じょかい

東河の七賢人と呼ばれた処士の一人。仕官をせず、しばらく田舎に於いて晴耕雨読の生活を送っていたが、右大臣西約により推薦され、五丈を平定した雷により、三顧の礼を持って迎えられ幕下に入る。玄偉の殺害を雷に強く勧めた。

【独眼竜正宗】どくがんりゅうまさむね

父先代正宗の死後、弟虎丸を擁して智の国の国政を司る。女将ながらその戦略、行動力で、南天連合軍の盟主として五丈の南征を頓挫させた。戦後、南天の統一に専念、事実上、それを成し遂げる。しかし、その後の北伐中に、

練の陰謀により叔父丁儀を中心とした国内の造反が勃発、次第にその権力を失い失脚する。大将軍として軍を掌握するがその行動は著しく制限され、座王都に隠棲させられる。しかしその隻眼の奥には天下を狙う光があった。

飛竜 ひりゅう

正宗の側近て知恵袋。親衛隊長として常に正宗の側にあり、犬馬の労を惜しまない。弾正の南征においても的確に正宗を補佐し、雷の猛攻より正宗を守り抜く。弾正の余命の短い事を予見し、又、羅候の動きに警戒するよう正宗に進言するが…

虎丸 とらまる

正宗の弟。智の嫡子である。国政、軍事を姉である正宗に全て任せているが、正宗の命により、練の羅候との修好のために義兄弟の契りを結ぶ。北伐の際、正宗失脚のために智王に祭り上げられる。

丁儀 ていぎ

正宗の叔父に当たる人物であるが、その度量の狭さと執心深さを嫌われ、虎丸の後見役を正宗に譲る羽目になり、政治的には何の力も持たない。しかし、権力への執着心は強く、正宗失脚を画策する。

羅候 らこう

練国国主。父羅鶴の死後、兵権を受け継ぐ。最初は南天の大国、智に従属していたが、徐々に勢力を広げ、南蛮王国王女、邑峻を嫁取り、その地盤を強固な物にする。正宗の北伐時には、隙を突き南帝閣を占拠、虎丸を智王に立て正宗の失脚を図る。南蛮王の死去後、その王位を継ぎ、練・南蛮二国の盟主となり南天に揺るぎない地位を築く。雷の偽帝討伐戦に於いては中立を宣言、だが、その野心に満ちた瞳は銀河中央を睨んでいる。

姜子昌 きょうししょう

練国きっての名将。若くして、練軍の大都督に任じられ、羅候を補佐し練国の発展に尽力する。正宗による早期銀河統一を阻止するべく画策、幼王虎丸を立てて正宗を失脚に追い込むのに成功する。だが誰よりも正宗の恐ろしさを知っており、その警戒を怠らなかった。飛竜とは浅からぬ関係か？

蹄疱 ていほう

練の若き武将。姜子昌の右腕とも言われるのが参軍校尉蹄疱である。知勇に秀でて、智、五丈、南蛮に開まれた

羅候を助け、奮闘する。また、戦功だけではなく南蛮や正宗の元に使者として遣わされ、首尾良く務めを果たすところなどは、彼の非凡な才能を示している。

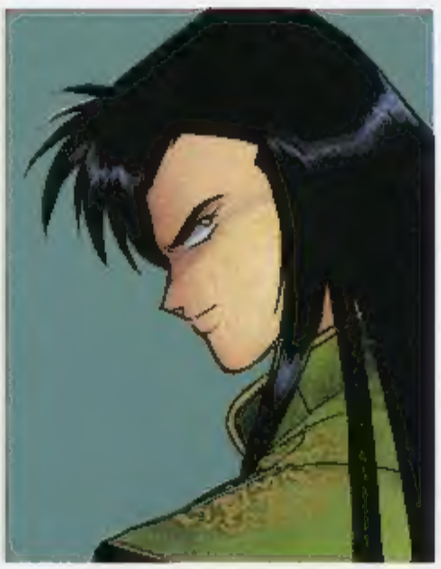
【夏候才】かこうさい

羅候配下の有力な武将。南蛮の重臣、夏候獣の息子である。羅候が南蛮の王位に就いた時、兄の夏候牙と共に反対し、クーデターを試みるが失敗、羅候の前に引き出されるが、その人物の器量の大きさに感じ入り、その後羅候の陣営に加わる。夏候一族は昔からその勇猛さで知られている。

【呂峻】ゆうしゅん

南蛮王琥瑛罵洲の一人娘。羅候とは許婚の仲である。南蛮王国との連携を強めるために、羅候の元に輿入れする。百人に及ぶ女兵士を従えるなど相当なじゃじゃ馬ではあるが、花嫁修行は熱心だった。得意料理の七色餃子のてんこ盛りで宮殿内を餃子だらけにしてしまった。とにかく羅候が好きで好きでたまらない若奥様である。

【玄偉】げんい



五丈四天王の一人で凄腕の謀臣。帝国崩壊後の戦乱の中、元帝国側の有力な武将であったが、早くも帝国の再興に見切りを付け、弾正側に寝返り、弾正に重く用いられる。骸羅の反乱の際、華玉、鳳鳴共々、殺害されたと思われていたが、某所での生存が骸延の知るところとなる。雷の偽帝討伐戦に暗躍、部下の華玉と西光王秦罵の許に身を寄せる。やがて、彼を抱き込み戦局の最終段階に於いて参戦し、斉王都の戦いでは雷を出し抜き、幻術を操り偽帝骸羅を倒す。その後も一勢力を維持し、新政府の中で雷と対立する。

【華玉】かぎょく

玄偉の腹心。李張道士の高弟でその秘められた力で玄偉に適切な助言をする。弾正の死期を予測し、玄偉を天下人にするため、同じく骸羅の知恵袋の骸延としのぎを削る。骸羅の反乱の混乱時に玄偉と共に消息不明となるが、雷と骸羅の対決を前に表舞台に現れ、策謀を巡らす。斉王都では師真と功を争うが寸での所で破れる。

【秦罵】しんば

銀河西方に広がる広大な西光国の国王。五丈とは長年に渡って衝突を繰り返し、その鎮圧に手を焼いた弾正は、五虎将を派遣してようやくその動きを押さえた。だが五虎将の亡き後、その野心を大きくし、亡命していた玄偉の口添えもあり、軍を興す。その実は操り人形に過ぎない。

権勢の限りを
尽くした
骸羅三兄弟の
死をもって
銀河に
新しい時代が
訪れようと
していた

わあ
すっごい
豪華な
料理!!

雷様の
戦勝祝い
ですもんね♡

ええ…

でも
今日は
それだけ
じゃないのよ
蘭々

今日はね
あたしの
お友達が
いらっしゃるのよ

お友達？

奥方様
麗羅様
ただ今
お着きに
なられました

ごくろうさま
三楽斎殿

麗羅！

紫紋…

よかった…
元気そうで

あの骸羅の
許にあなたが
残ってると聞いて
気が気じゃ
なかったわ

紫紋…

うちのこと
そんなに
心配してて
くれたん？

だって
お友達でしょ
あたし達！

麗羅？

おおきに…

ほんま
おおきに…

やだ
麗羅ったら
泣かないで
せっかく会えたのに

さあ
中に入って
飛びっ切りの
宴席を
用意してるの

あ…
あかん
あかん！

うち
雷に約束したんや
もう酒はやらんて
せやから
かんべんや！

麗羅が
お酒飲ま
ないなんて
おかしいわ

それに
今日は
雷の戦勝
祝いでもあるし…
ね？

ん！

う――ん
かなわんな――
雷
ごめんしてな

こら
ごっつう
ええ酒やんか！
入道和尚のとは
違うわ!!

立場が
逆になって
しもたなあ…

え？

紫紋が
佐倉の城から
武王都に
連れてこられた
時や…

あんた
家はなくす
親兄弟も
おらへん
一人ぼっち
やったやないか

今の
うちが
そうや…

父上は
死んでしもて
家臣もバラバラ…
今じゃ
うちはたった
一人や

寂しかったわ
あの頃は…

でも
雷が
側にいて
くれた…

！

う…
うちかて
雷が…

あちゃ…

あかん
あかん
あかん

罠？

ま　また
雷との約束
破る
とこやった

もう
紫紋と雷に
ちょっかい
出さへんて
約束やった

クス…

ねえ麗羅
どっちが早く
雷の子供を
産むか
競争よ

し…紫紋!!

ま…待ったらん
かい!

う…うちは
別にそーいう
つもりは
ないんや

今は戦国の世…
女は
天下人の子孫の
繁栄を第一に
考えなきゃね

紫紋
それ
本気で
ゆーとんのか

大分
酔っとるんと
ちゃうんか?

ホレ
ホレ

それに…

もう
色気じゃ
羅羅に
負けないわよ

くーーーっ
なんや
この自信は……!!

やっぱ
正妻っちゅうのは
重みが
ちゃうんやろか…!!

よっしゃーーっ!!

うちも
負けへんでーーっ
産んで産んで
産みまくったるーーっ

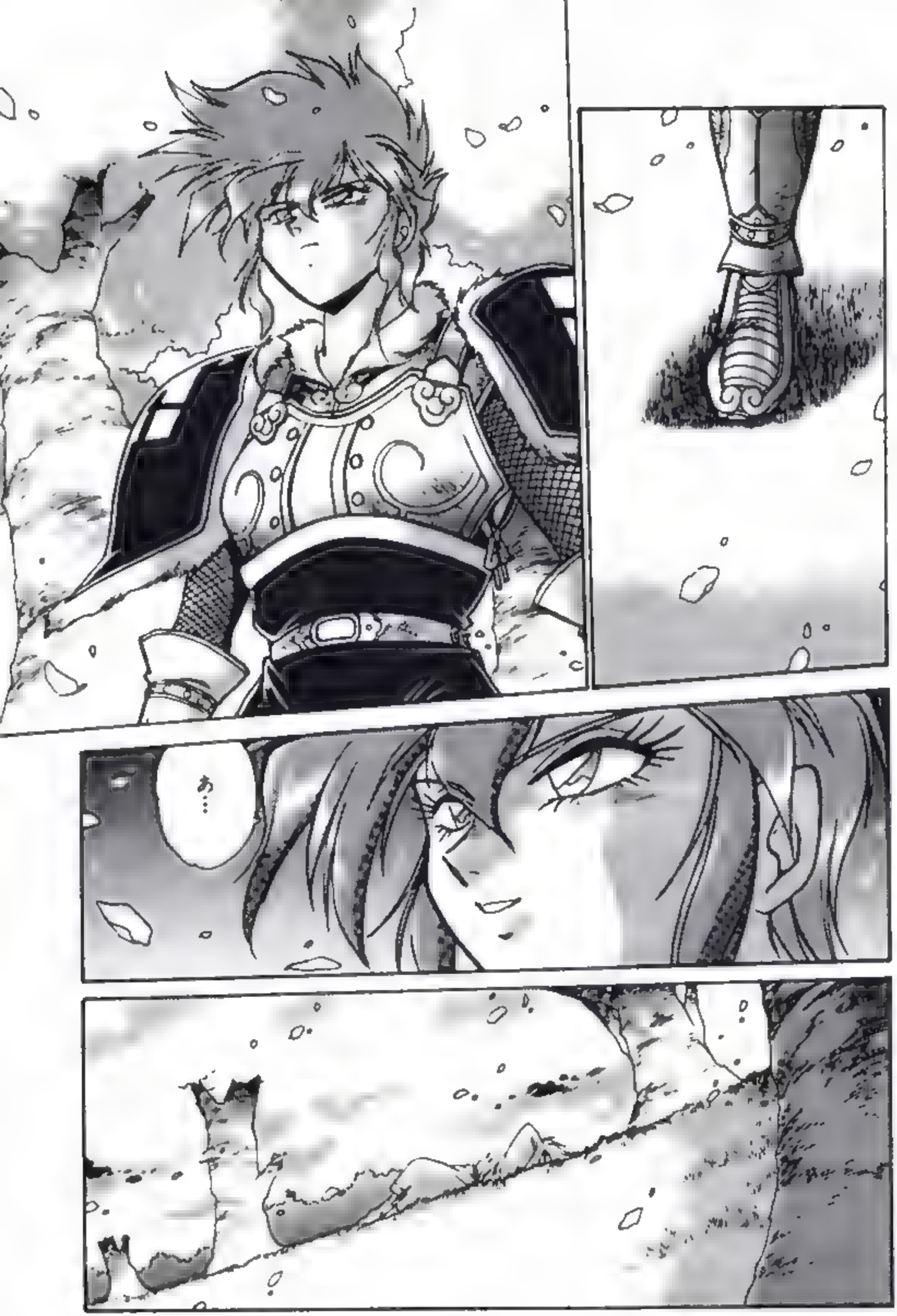
さっそく
今日から
お肌
磨くでーーっ!!

待ってや
雷!!

こうして
雷の偽帝討伐戦の
勝利を
ささやかに
祝う二人だったが…

銀河の果てには
その報告にも
届く一つ動かざる
もう一人の女がいた…

智 座王都


あ…

正宗様…

正む…

飛竜か…

お休みの
ところ
申しわけありません

桜に
埋もれたか…

今のわたしには
似合わぬ
姿だな

い…いえ
そんな…

…で
何か用か？

はっ
竜我雷の
偽帝討伐ですが…

戦の話は
よい

桜の下で
そんな
血生臭い話は
似つかわしく
なかろう

は…はあ…
今日
暇なのか？

はい
一応非番ですが…

なら
わたしと
花見を
しよう

花見で
ございますか？

では
酒でも
用意いたしましょう

そんなものは
いらん
眺めているだけで
充分だ

さようですか…

ああ
それと正宗は
よせ
その名は智王に
お譲りした

今では
元の紅玉を
名乗って
おるではないか

いえ…
わたしにとって
正宗様は
あなたしか
おりません…

誰が何と
いおうと！

ふふ…
律儀な奴だな
おまえも

どーでもいいが
その鎧を
脱がぬか？

もちっと
楽な姿をしろ

いえ…
それは
できません

武人は
常に
戦場に
身を置くもの…！
たとえ
どんな時でも
武人である限り
このいでたちは
変わりませぬ！

わたしは
正宗様の
側にいられる
だけで
充分なのです…

ははは
まあいいが
そんな風では
いい男の
一人もできんぞ

けっこうです!!

見事な
桜吹雪だな…

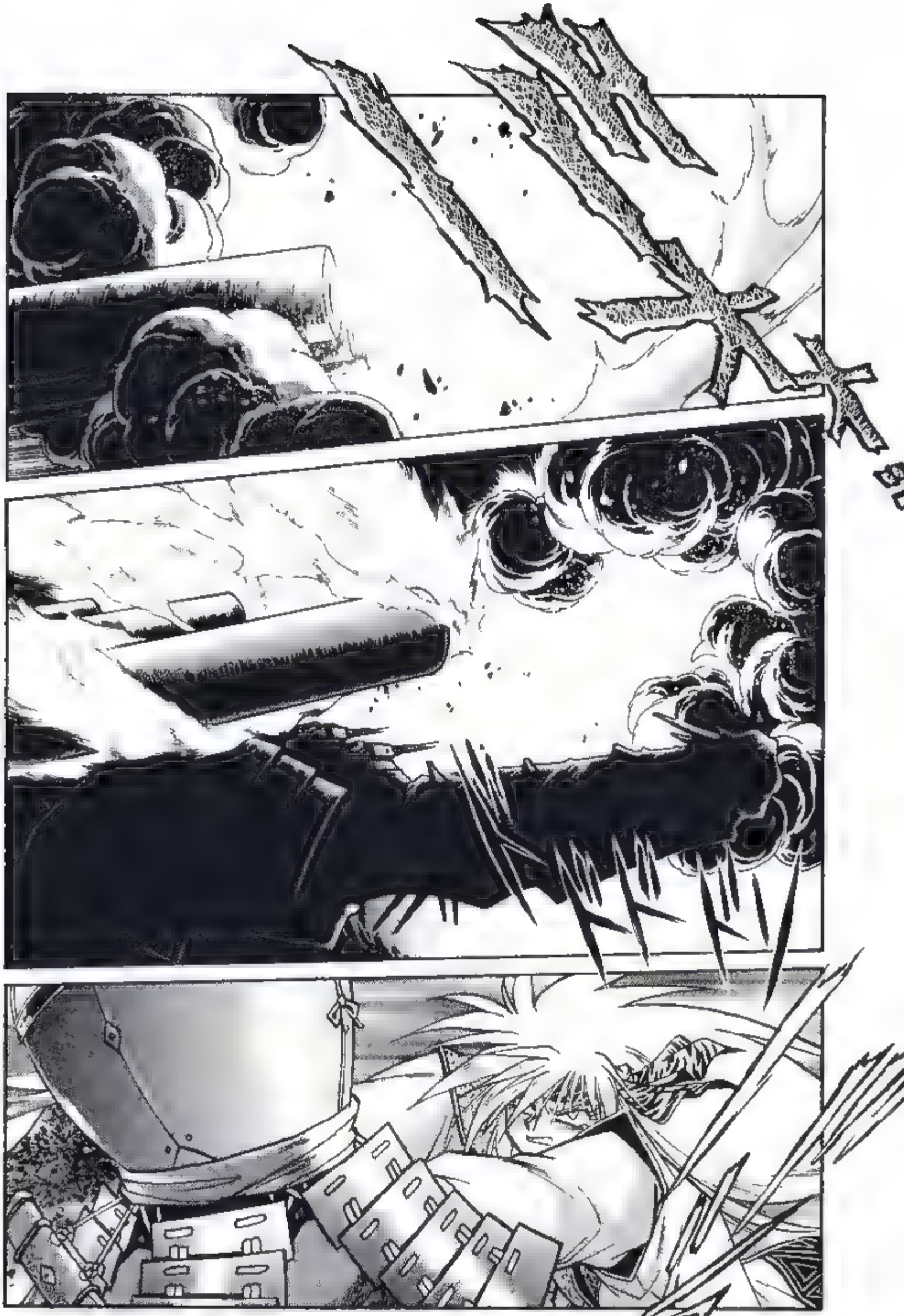
あの時もそうだった…

姫様

紅王様

ゴオオオ…
父上が!!

宇宙全てが敵だったあの頃…



お屋形様!!
わたしにかまうな!
行け!!
くくくっ…!!
紐上…!!

そのお姿は!!

家するてない
晃丸…!

わたしの右目は
銀河を見通す
ために
置いてきたのだ…

智の天下を
わたしは宇宙の
目で見ることか
できよう…
心配するな

結上…

結上…

……

そち達は
皆 同じ考え
なのか！

わからぬ！
なぜ姉上に
会っては
ならんのだ！

陛下
それは
丁儀殿の
申した通りで
ございます

今 大将軍として
紅玉殿は
北方の守りについて
おりまする
座王都で

姉君とはいえ
今は臣でございます
軽々しくお会い
なさるのは
よろしくございません

わたしは
世間話をするために
姉上に会うのでは
ないぞ！
天下大計について
相談したいのだ!!

南京様の
竜我雷は
偽帝を討ち
五丈を手中に
収めたと
聞くぞ！

また天下が
大きく
動き出したのだ

なれば
練王羅候様と
ご相談ください

なに!?

陛下と羅候様は
義兄弟であり
盟友でございます

天下大計に
ついてご相談
するなら
何をおいても
羅候様と
なさるべきです

そのつもりで
ここ益州都まで
来ておるではないか！

だが
羅候殿は
前線に出られ
この都に
帰られるのは
いつのことに
なるか
わからない…！

羅候様も
五丈の様子を
お気になさって
らっしゃる
のでしょう

わかりました
とにかく陛下の
ご希望を
使者に託し
羅候様の許に
送り出します

うむ
頼むぞ！

ははっ
それでは…

……

……

うぬぅ…
羅候の犬どもめ…

智を練に売るつもりか…!!

なにいっ
天詳が
武王都に
向かったと?

は…
おそらく紅玉様の許へ

おのれ
天詳…
忠義ぶり
おって…!!!

とりあえず
姜子昌殿に
報告し
宮殿内外に
厳戒態勢を
とらせよ!

追っても
もう間に合うまい…!

天詩が
わたしに？

はいっ
火急の用件
ぜひとも
お目通り
願いたいと

そうか…

飛竜
祝宴の
用意をしろ！
女や楽師も
集めろ!!

香も
焚け
飛びっきりの
やつをだ！

祝宴
ですか

そうだ
それからな
おまえは
酔っぱらっておけ

！

わかりました

おおせの
通りいたしましょう

何やら
騒がしいようですが

はい
三日前から
お祭り
騒ぎでして

三日前から？

む…

この
香りは…

しかも
なんという下卑た
香を焚かれて
おるのだ…

屋敷の
奥でこのような
香を焚いて
おられるのか
紅玉様は…

天詳で
ございます

う…!?

こ…
これは…！

姜子昌様！

先程
益州都の
丁儀殿より
使者が参りまして
これを…

跪庖か

うむ…

智の旧臣ともに
不穏な動きが
あると聞いて
いたが…

「綫・南蛮連合＼大都督　姜子昌

……

なにか…？

その使者とやらを
連れてこい
直接聞きたい
ことがある

は？

ははっ

偉大なる
大都督様による
ご引見
まことに光栄で
ございます

さっそくだが
使者殿
この丁儀殿の
書簡について
お聞きしたい

正宗
いや
あの独眼竜が
腑抜けに
なった故
心配はいらぬと
あるが…

どういうことだ？

ああ
そのことで
ございますか

実は
一部の群臣が
紅玉様に
内通しておりまして

その者が
紅玉様に
恐れ多くも
反逆を
そそのかしたのて
ございます

しかし時に
紅玉様は
酒池肉林の
宴の真っ最中

そして
こう申したそうて
ございます

なぜ
一気を
殺らぬ

殺る
殺る
殺る

本心も
本心

世は今や
紳・五丈の
強時代…

そんな時に
この智に
どんな生き方が
ある？

しかし
このままでは
殿下は緑の
属国で
ございますぞ！

天詳！

今は座して
太平を求める
それが智に
残された道だ

辛いなことに
智は羅候様の
義兄弟…
安穏に暮らすには
ちょうどよい
ご身分であろう

いやはや
とんだ独眼竜で
ございます

長い
駐留生活で
すっかり
牙も丸くなった
ようで

紅玉様の
決起を期待していた
天詳とその一味は
落胆のあまり自刃

不穏分子は
一掃されました

よって
姜子昌将軍には
北伐に専念なさる
ようにとの
丁儀殿の
お言葉で
ございます

なんたる
読みの甘さだ!!

は…
しかし…

だれか!
筆を
持ていっ!!

さあ!
これが
俺の返答だ!
急いで益州都に戻り
智王の周りを
固めよ!!

は…
はい

夏候才！

はっ〃

そちは
一軍を率いて
益州都への
航路を押さえよ！
益州都から
一人たりとも
外へ出すな！

お　お待ち
ください

それがし
先手の大将なれば
死も恐れませぬが
何でそのような
暇なところに差し
向けられまする
〉

夏候才
おぬしほどの
男でも
まだ独眼竜の
恐ろしさが
わからぬか！

たしかに
独眼竜が
恐るべき人物なのは
認めますが
今の報告では
すでに抜け殻では
ございませんか！

腕のある
狩人ほど
自分の気配を
消せるのだ

女とはいえ
一度は
天下の大権が
手の届くところまで
行き着いた
英傑だ

例え
今の立場が
どうあろうと
その心の内の
覇者の灯は消せぬ

それに奴には
もう一匹の
小ずるい雌狐も
ついておる…！

それ故
益州都は暇な
ところではない！
後方で騒がれては
北伐どころでは
なくなろう

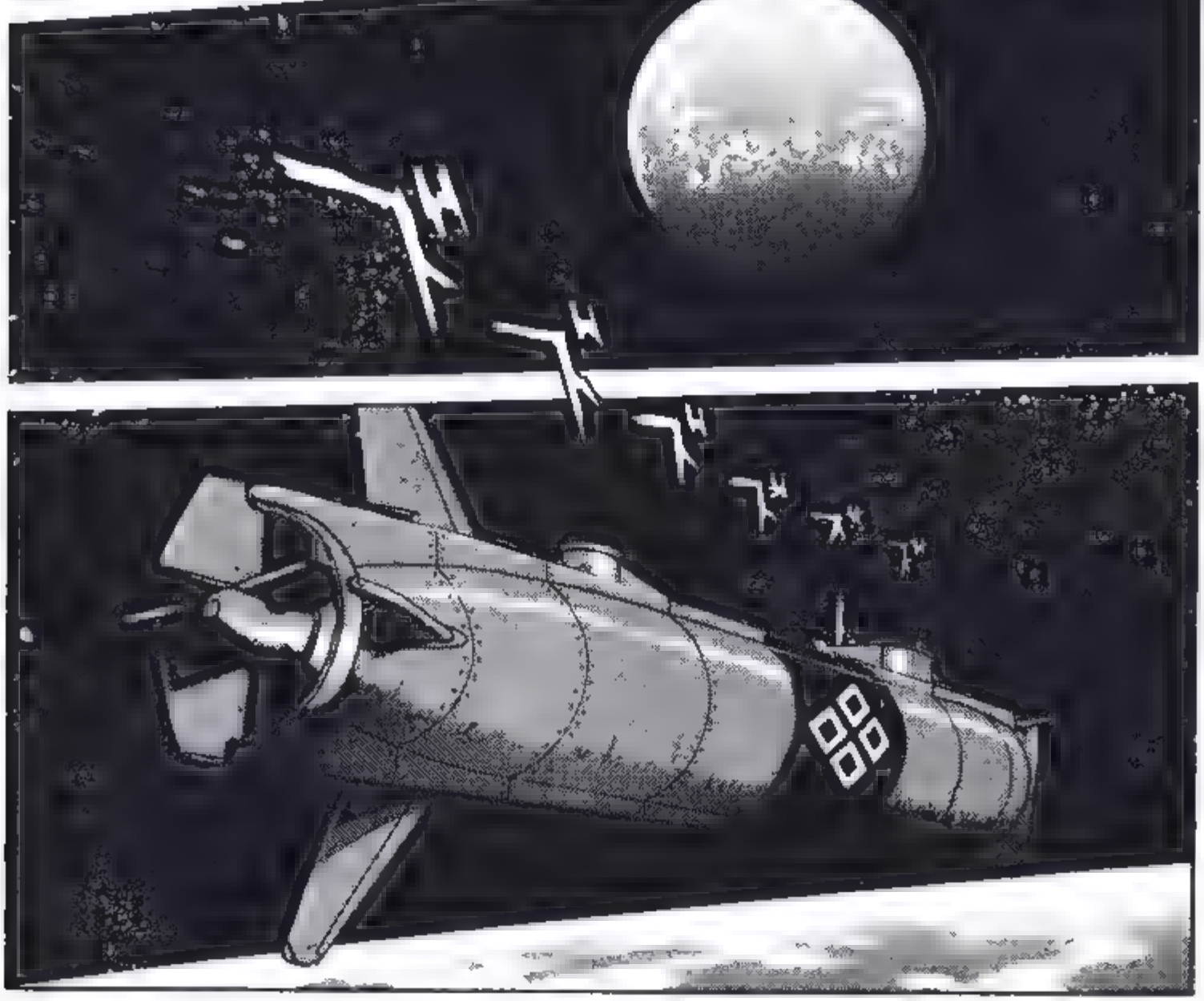
わかりました
ご期待にそうよう
勤めます

頼むぞ！

夏侯才にまかせれば布陣は完璧だが…

問題は宮廷内の人間の心の方だ

独眼竜の恐ろしさを知らぬ人間が多すぎる…！



正宗様
益州都で
ございます

うん…

天詳
お ぬしを
たばかったことを
許せ…

おまえの死は
決して犬死に
ではない
証明してやる

ほう
春子鳳陵は
紅玉の死に体は
偽りとな

はい
くれくれも
油断めさるなと

バカな…
姜子昌も
案外
心配性じゃのう

天下の
大都督としては
小さいことを
気にしすぎじゃ

申しあげます！

いかが
いたした！

はい
紅玉様と
お付きの飛竜様
ご到着で
ございます！

なにいっ！

智王との拝謁を
求めているのか!!

はい
香を献上
したいと
おっしゃられて
おります

兵は
連れて来て
おるのか!!

いえ
一兵も…

丁儀様
これは一体…

紅玉様の
真意は
いかに…

うむむ…

こちらから
兵を差し向けて
捕らえますか!

いや…
事を荒立てては
面倒じゃ…

とにかく
朝門を閉じ
中に入れさせては
ならん!

陛下は
気分が優れぬ故
お会いできぬと
言いわたせ!

はっ!

しばらく
門前払いを
続ければ
やがて
退散しよう…!

申しわけ
ございませぬ
陛下はご気分が
優れぬ故
お会いできぬ
そうでございます

そうか…

ならば
ご気分が
優れたなら
知らせてくだされ
それがし
ここでお待ち申す

その日から
関羽は
三日三晩…

朝門の前で
待ち続けた

しつこい女よ…
何を考えておる…？

一方
この話は
宮殿内に
広まった

あの独眼竜正宗が
朝門で
二日間
門前払いを
くらっているとゴクン

やがて
後宮の中でも
うわさされるように
なっていった

あの
独眼竜正宗が？

はい
三日三晩
朝門の前で
智王の拝謁の
お許しをお待ちに
なっておられます

けど
姉弟でしょ
さっさと
会いに行けば
いいじゃない

まあ邑蛟様
それでは
君臣のけじめが
つきませんわ

ふ――ん
そーいう
ものかなー

！

じゃあ
あたしが
正宗に
会うわ

えっ
しかし…

いいから！
会ってみたいのよ！

以前
智の
宮殿で会えた時は
ろくに話も
できなかったし

羅候の
ケンカ相手の
総大将じゃない
よ――
見ておきたいの

なんですって！

あの
独眼竜を
宴席に
招待なさる
ですと!!

なんですって！

奥方様
それはなりません！

たしかに
練と智は
同盟国では
ありますが
あの独眼竜だけには
気を許しては
なりません！

なんですって！

練王が留守の間
この城の事は
全てあたしに
まかされている
はずよ！

しかし…
姜子昌様も
注意せよとの
おおせで…

あんたは
姜子昌の
命令は聞けて
あたしの命令は
聞けないって
いうの!!

智国大都督
紅玉様
おなーりー

刀は
預けよう

遠路
益州都へ
ようこそ
正宗公

主人・錬王は
あいにく
留守にしてるけど
存分に
お楽しみあれ

いたみいります
邑峻様

それでは
錬と智の
行く末に
乾杯――!!

どうだ?

はっ
今のところは
別に…

手配は
できておろうの

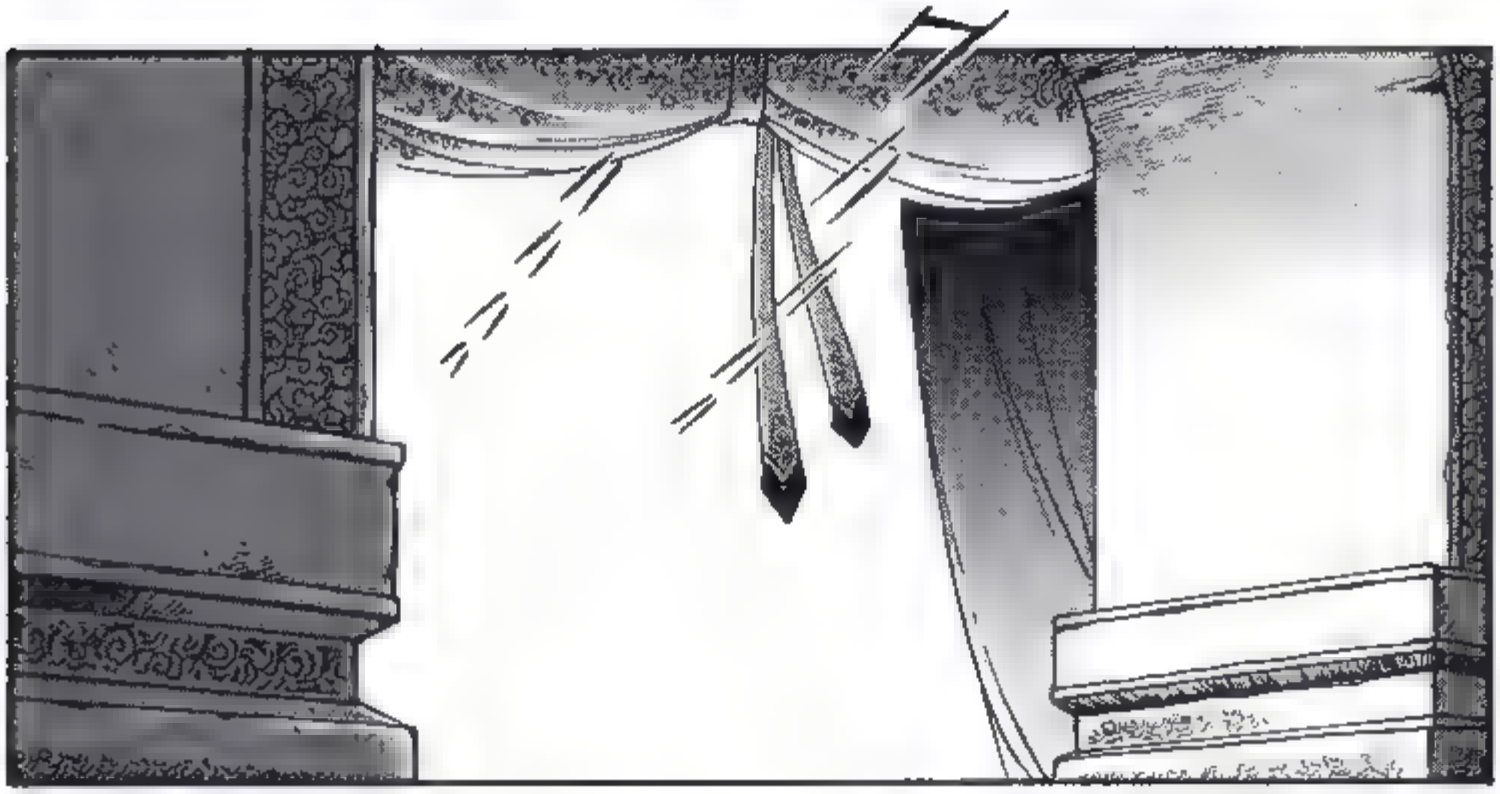
幕裏に…

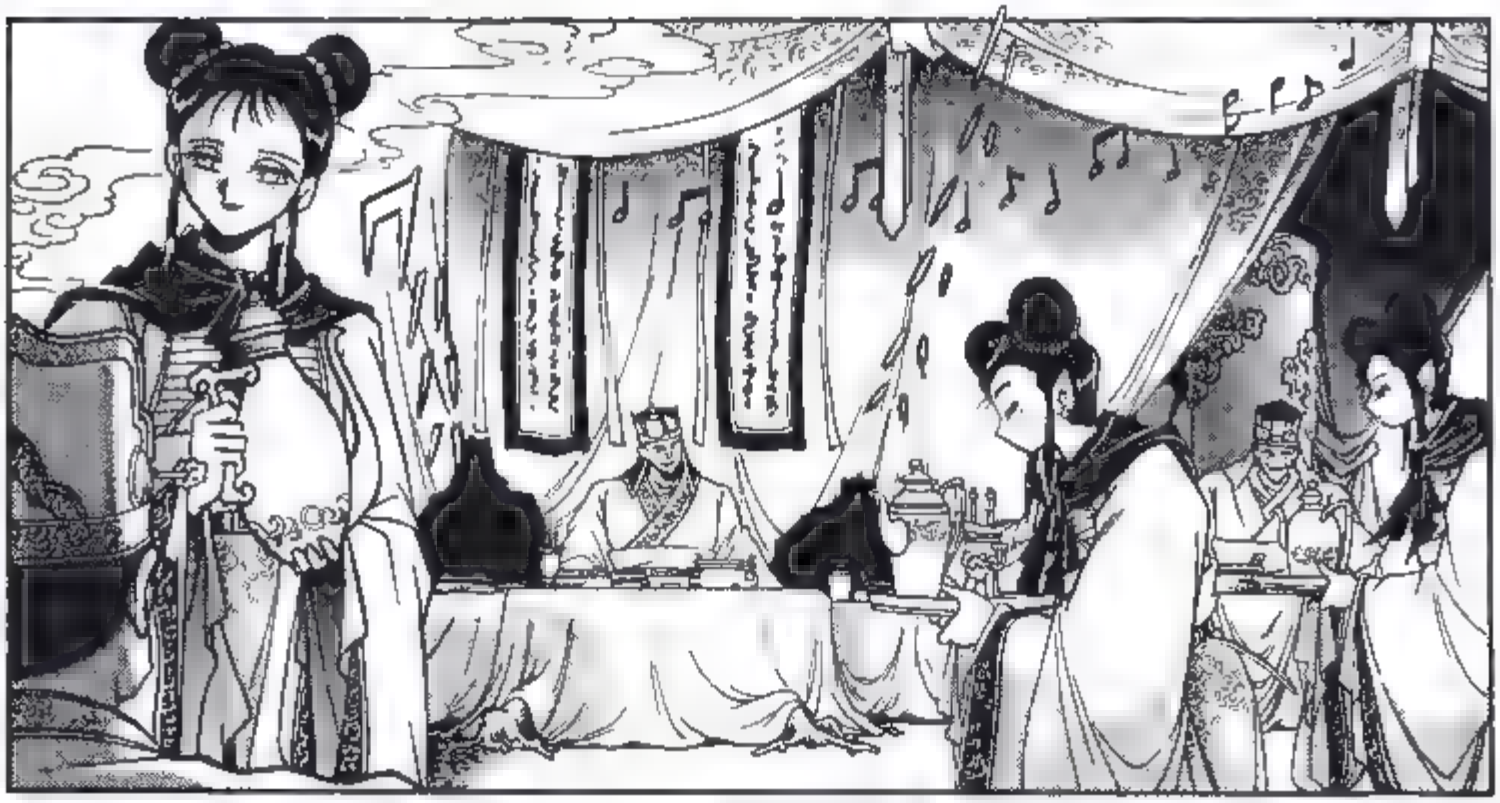
いつでも斬り込めるよう兵を伏せております

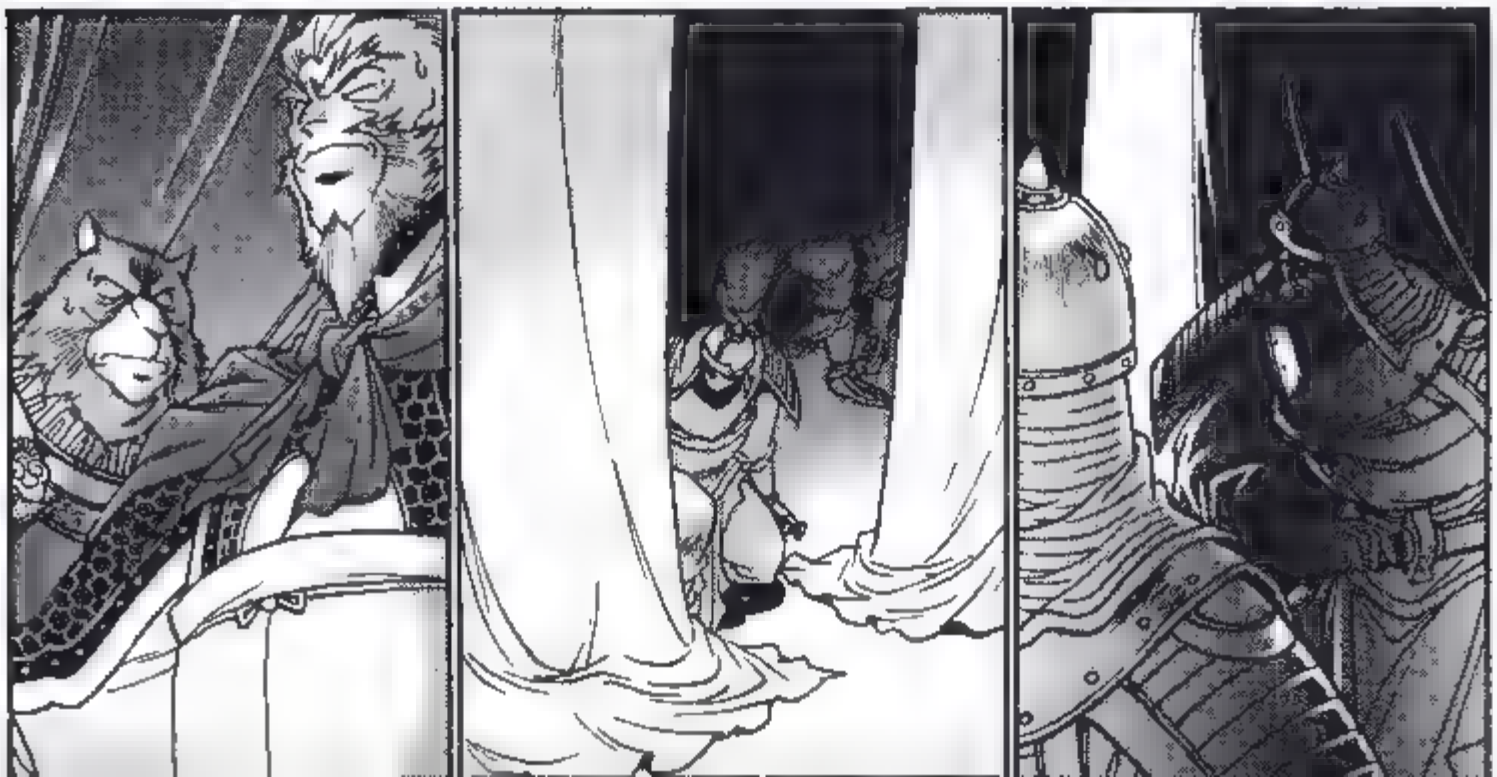
邑峻様は武芸もおできになるが…

とにかく気を許すな！

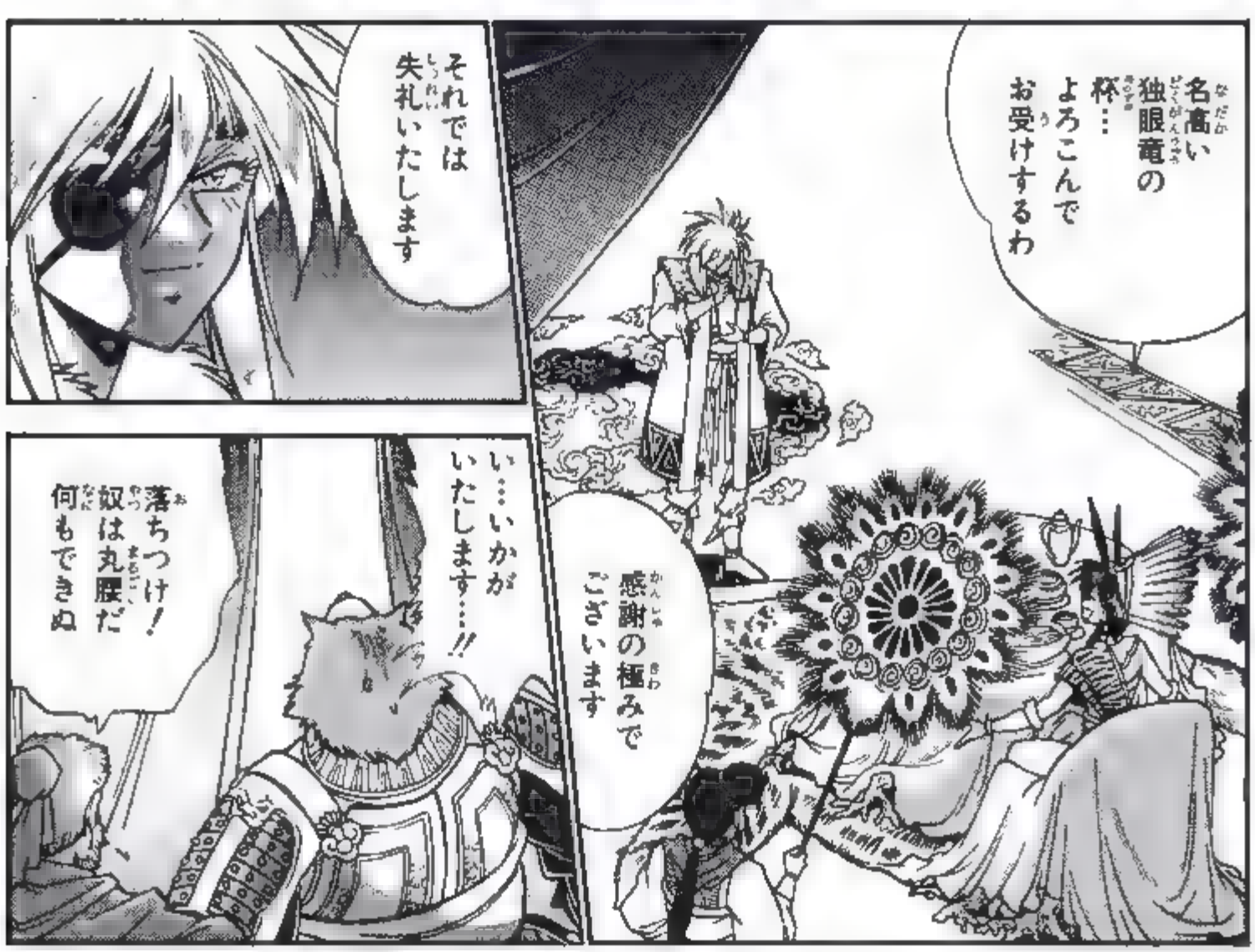
はっ！







!
王妃様
まことに恐縮で
ございますが
お近づきの
しるしとして
この紅玉の
杯を一献
差し上げたいと
存じますが


名高い
独眼竜の
杯…
よろこんで
お受けするわ
感謝の極みで
ございます
それでは
失礼いたします
い…いかが
いたします…!!
落ちつけ!
奴は丸腰だ
何もできぬ

あたしと
あなたがこうして
杯を交わしてるなんて
羅候が知ったら
どんな顔するかしら

さようで
ございますな

ふん！
羅候ったら
あたしだって
お客の
もてなしくらい
心得てるん
だから！

さあ
正宗公
あたしの
返杯
受けてくださる
わね

……

正宗公？

!!

きゃあっ!!
王妃様(おうひさま)!!
お静(しず)かにしていただきたいですな 邑姫(ゆうきさま)様

おのれ!!
出会え
出会え!!

正体を現したか
独眼竜!!

逃げおおせる
ものではないぞ!!
早々に王妃様より
手を離せ!!

ふん!
甘いわね!
これで
あたしを人質に
取ったつもり!?
なめるんじゃ
ないわよ!

邑鮫様
わたしの爪には
毒が
仕込んで
ありましてね

えっ!!

あなたの
柔肌に
突き刺されば
最後…
傷跡は
どす黒く
汚くただれ
二度と羅候殿に
かわいがって
もらえませぬぞ!!

ひ…ひい…!!

くっ!!

決して
あなたの命を
取ろうと
しているのでは
ない

あなたという
通行手形が
欲しかった
だけです

おわかり
ですかな

あ…
あ…

あんた達
武器を
捨てて
道を
開けなさい!!

し…しかし

あたしの
命令が
聞こえないの!!

早く
するのよ!!

正宗様！

カロン

カロン

宴はよかったぞ

次は智での宴に皆招待いたそう！

ムッ！

何事じゃ騒々しい!!

陛下の御前であるぞ!!

そ…それが
こ…紅玉様が…!!

紅玉様が内殿に…!!

な…なんじゃと!!

姉上が!?

姉上が参っておられるのはまことか!!

はは―っ

む…む…

謀反じゃ！
これは
紅玉様の謀反じゃ!!

近衛兵は
何をしておる!!
あやつを御前に
近づけるな!!

おじ上!!

さあ
ここは危険です！
わたしと共に
まいりましょう!!

ええい
離せ!!
わたしは
行かないぞ!!

姉上が謀反とは
どういうことです!!

だまされては
なりません
陛下!!

あの女は
陛下を拉致し
権力を我がものに
しようと
たくらんで
おるのですぞ!!

おじ上！
陛下への拝謁の
お許しを
いただきとう
ございますな！

！

姉上!!

なかなか
お許しを
いただけぬので
ずいぶん
遠回りをいたした

姉上!!!

ぐうぅぅぅっ!!

き…き…
きさまあ…!!

退がれ
退がれ
退がれ——っ!!

陛下の御前に
抜き身の刀を
振り回しての
狼藉!
まだ
自分の非礼に
気づかぬか——っ!!

ふ…

この刀が
非礼と
申すか…
おじ上!

だ だれか
この無礼者を
たたっ切れ!!

古来 戦場に出ず
血しぶきすら
浴びず
勝利の美酒に
酔う鞟は

おじ上のような
寸鉄身に帯びぬ
青白い長袖の
鞟よ!

そのおまえが
この刀を
非礼と申すのか!!

ひいいっ!!

このうじ虫めが!!

飛竜!!

はっ!!

成敗!!

が…っ!!

亡者(しゃ)め…

国王(こくおう)の印(しるし)を持(も)ていっ!!

はは
はは——っ!!

ど…
どうぞ

陛下
長居は
無用
参りますぞ！

どこへ
ですか
姉上！

知れたこと…

懐かしい
智の国へです！

は…
はいっ!!

ま…待てい
独眼竜！

！

きさまの目的は果たしたはずだ！

王妃様を解放しろ!!

そうもいかん諸君らがおとなしく我々を帰してくれるとは思ってはおらん

今しばらく通行手形は大事にしておきたい

もしお腹立ちのようなら…

我が国の重臣一同を下げ渡そう

煮るなり焼くなり好きにいたせ

ひえええ…

そ…そんな…!!

さらばだ！

くくくっ!!

見送りはけっこうだぞ

むうぅぅぅ!
義姉上…
!!
ムーーっ!!
ングーーっ!!
シーーっ!!!

……!!

……!!

陛下…

姉上
いかがしました
そんなに
かしこまられても
困ります

陛下の御前での
非礼のふるまい
お許し願いたい！

何を
おっしゃるのですか
見えない牢獄に
押し込められていた
わたしを
姉上は解き放って
くださった

感謝こそすれ
なんで
そのふるまいを
とがめたり
いたしましょう！

でも
宇宙は
いいですね
ほんと広いです
もう二度と
見れないんじゃ
ないかと
思ってましたよ

……

姉上
ありがとう
ございます

ははっ！

後方より
大型艦多数
急速接近!!

〃

姉上!

ご安心ください
敵の追跡艦
でしょう

こちらに
人質ある限り
何もできやしません
金魚のフンの
ように
ついてくるだけです

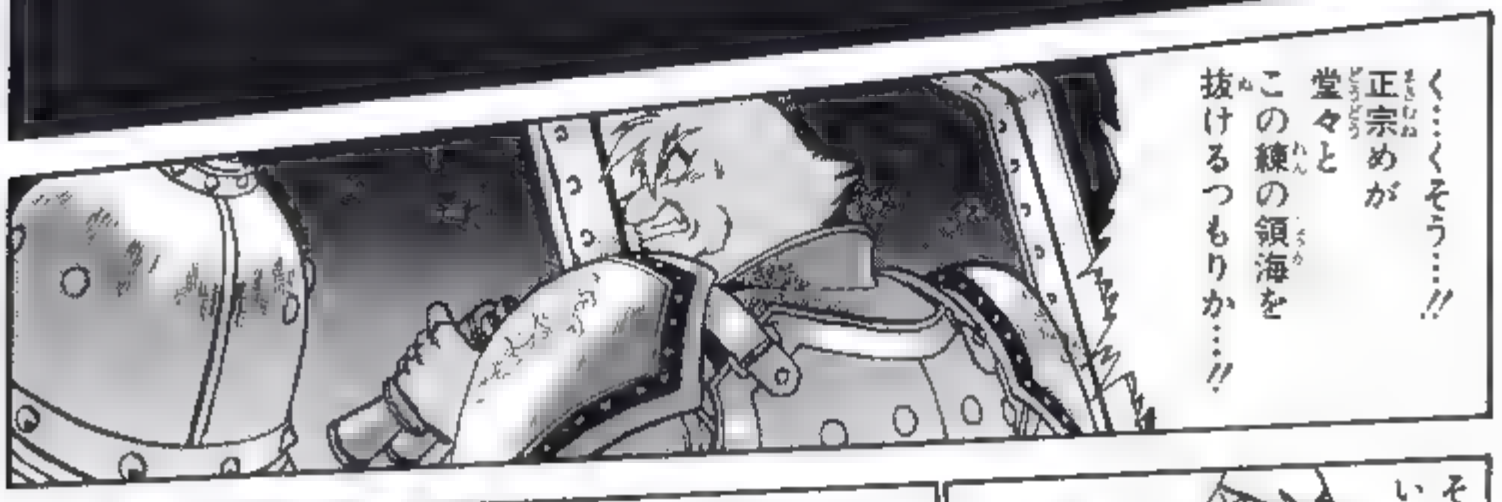
軍師才
将軍より
入電てす"
正宗様
前方にも
敵軍隊が
現れました
かなりの勢力です
ふん
手回しのいい奴が
側にもいるな
妻子員あたりの
考えそうなことだ
おそらく…
しかし
あやつとて
この船の
特等客までは
見抜けなかった
ようです
な…なにいっ!!
邑岐様が
――っ!!

きさまら
一体何をして
おったのだ!!

ははっ
面目のほどこし
ようも
ございま
せん…
油断で
ありました!

だまれ!
油断ですむことと
すまぬことが
あるわ!!

敵
高速艦!
前方を通過
します!!


く…くそう…!!
正宗めが
堂々と
この練の領海を
抜けるつもりか…!!

そうは
いかんぞ!!
姜子昌様の
厳命でも
あるのだ!!

胡雷!
単于!
そち達も
我々に合流して
正宗を追うのだ!!
逃がしてはならん!!
はっ!!

各艦反転!!
横陣を
ひいて
全艦追跡せよ!!

正宗様
敵艦隊が
追跡してきます

両翼の艦は
速度を上げて
我々の前方に
回りこもうと
している模様！

ん――っ

ん――っ

ふはっ〃

こちら
親軍
夏候才である！

正宗公
停船せよ！
そんな小型艦で
とこまで
逃げ切れると
お思いか〃

そうよ！
逃げ切れるわけは
ないわ！
早く降伏しろ〃

こらっ
正宗
聞いてんの〃

こ安心を
邑峻様
あなたの身に
危険は
及びませんよ

夏候才は
親父ゆずりの
頑固者よ〃
見逃したり
しないわ〃

たが
主家の娘を
吹き飛ばしたくは
なかろう

包囲態勢
完了しました!!

あんな船では
高速て国境までの
燃料はもたぬ

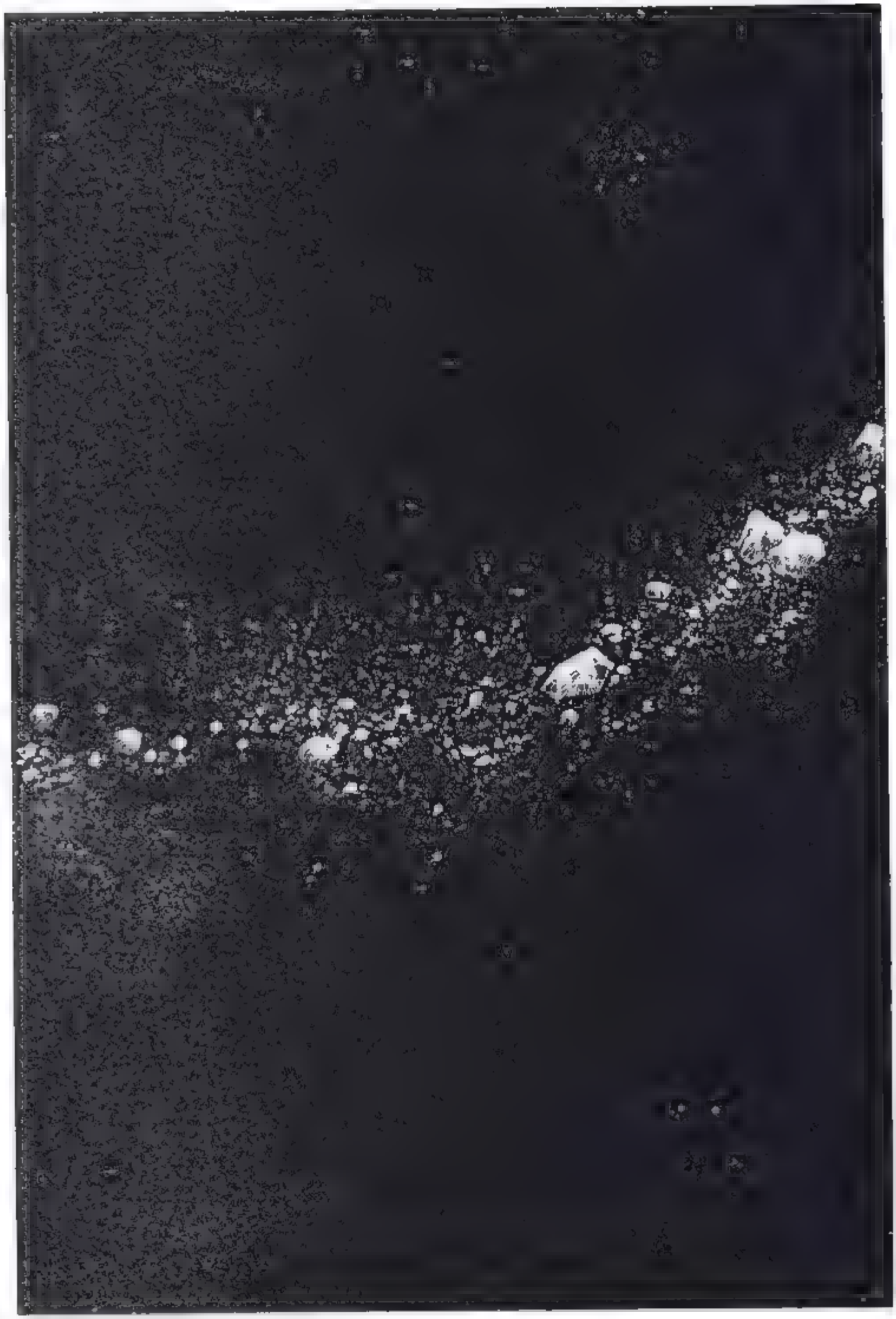
動けなくなった
ところを
強行接舷しても
かまわぬ

兵糧攻めと
いう手もある!
あきらめろ
正宗!!

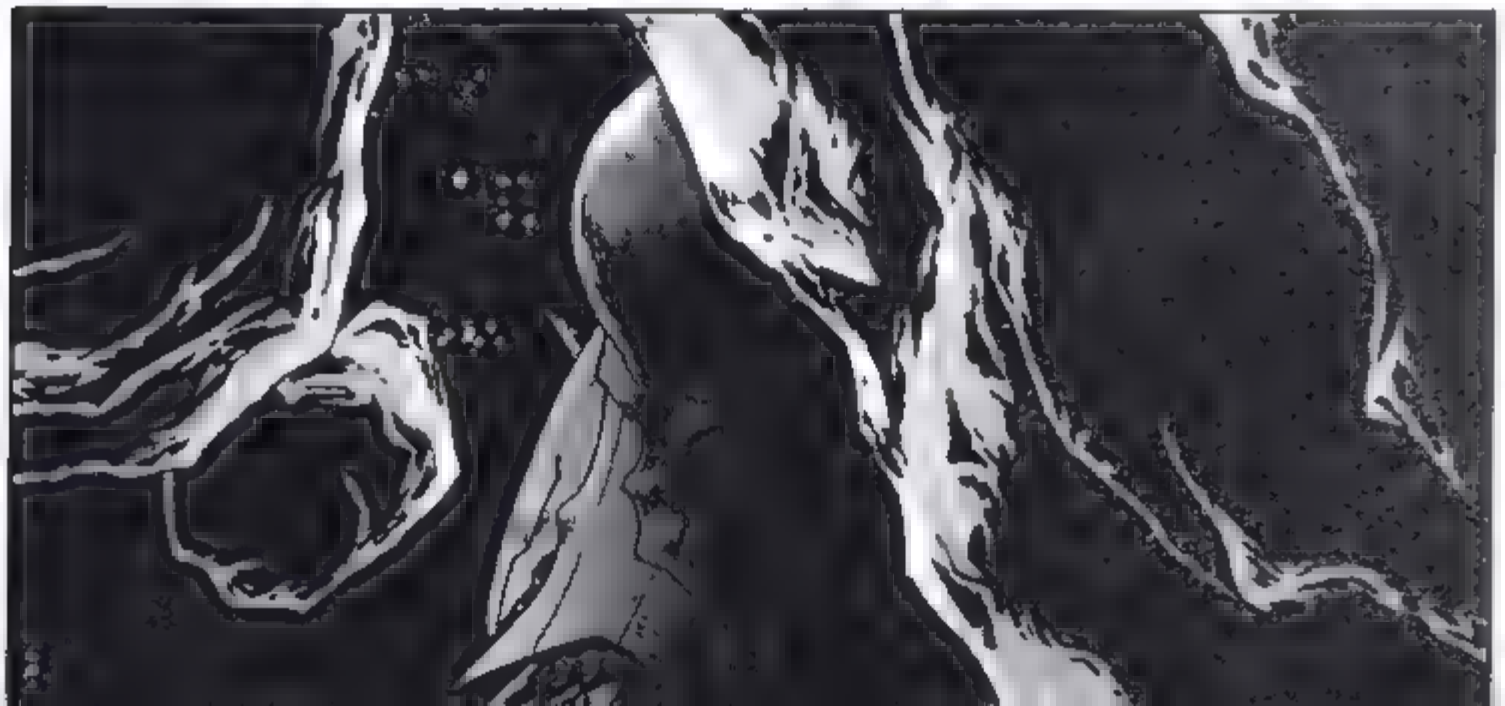
夏候才様!
前方岩礁群
多数!

海図に
あるものか!?

はっ
北四四一
岩礁てす!
およそ二十海里の
規模てす!



小型艦！
岩礁群へ
突入！
ふん
そんなもので
我々を
まこうとでも
いうのか
いよいよ
策がつきたか
正宗！
お待ち
ください！
岩礁群の
中に
何かいます!!
なんだと!!



あ…あれは
大帝山(だいていさん)!!!

智軍(ちぐん)の
旗艦(きかん)だ!!

くそうっ
陣形を
立て直せ!!

反撃
するぞ!!

全砲門
開け――っ!!

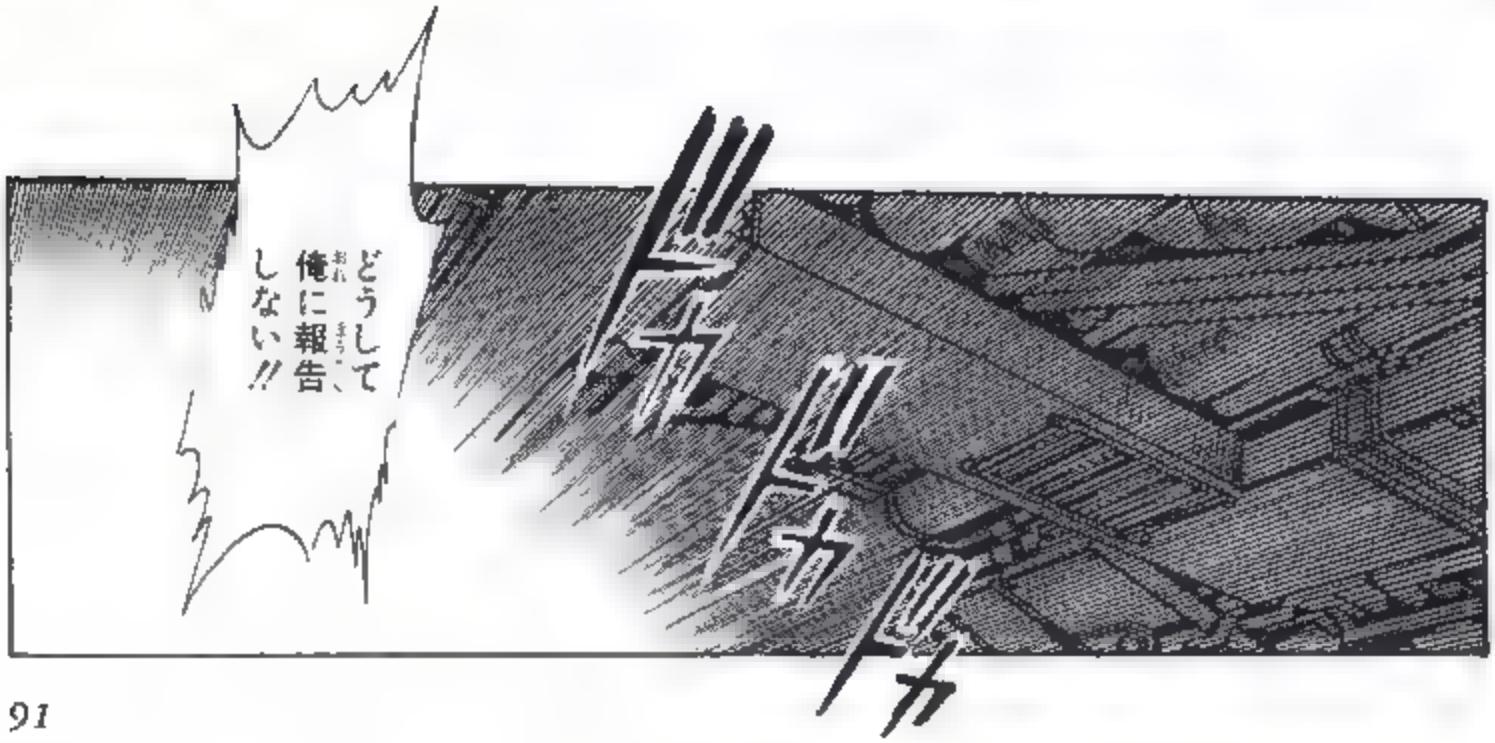
お…お待ちください
それでは
艦橋機まで
巻きぞえに
なってしまい
ます!!

攻撃は
なにとぞ
おひかえを!!

おのれ――っ!!
正宗が――っ!!

全艦
敵の射程外に
退避しろ!!

さがるのだ!!


どうして俺に報告しない!!

俺が寝てたからだなんていいわけにならんぞ姜子昌!!

職務怠慢だ!!

申し訳ございません…わたしの考えが甘うございました

甘いも甘い!大甘だぞ姜子昌!!

これで全ての計画が水の泡だ!

智王を虜にして智の国を牛耳るというおまえの策がだぞ!

もし!俺が聞いていたら…!

聞いてたら…

聞いてたら俺は…

あ――っ
もういいっ!!
済んだことだ!!!

はっ
重ねて
おわび
いたします

…て
邑峻は?

国境を越えた
ところで
解放され
夏候才により
救出されました

羅候~~~っ!!

邑峻!!

羅候~~~~~っ!!
くやしいよ――っ!!

あの独眼竜の奴!
あたしの顔に
傷つけるとか
言ったんだよ!!

それにさあ
腕も足も
縛ってさ――っ!!
強くつわまで
かまして…

ひどいん
だから――っ!!

お願い
羅候！
あんな雌狐の
いる国なんか
滅ぼしちゃって
――っ"

むっ！
むっ！

ちょっと
羅候
聞いてるの！

夏侯才！

羅候様
申し訳
ございません

大任を
命じられながら
この不始末…
いかようにても
ご処分
くだされ！

邑峻！

だからぁーっ"

……

きゃん！

だまれ!!

おまえの軽率な行動のためにかけがえのない将の命を散らすところだったんだぞ!!

いった〜〜〜

なによ
羅候の
バカ!!
最低!!
もう
別れて
やるんだから!!

わ――っ!!

奥方様!

止めるな!

……

すまなかったな
夏候才
決して
おまえの責任では
ない…
しっかりと傷を
いやしてくれ

と…殿…

あ…ありがたき
お言葉…!

それがし
なんとしても
ご恩には
報いまする

殿
その後の
智の動きですが
報告が入りました

どうした
国境の軍勢を
増強して
いるのか？

いえ
それどころか
全軍を率い
南帝閣にも
立ち寄らず
東へ東へと
向かって
いるそうです

何？
首都にも
立ち寄らずにか？
何のために智王を
連れているのだ？

南帝閣

姉上
なぜ南帝閣を
通り過ぎて
しまうのですか？

申し訳ありません
陛下

我々は当分
南帝閣には
もどれません…

え？

どうして…

我が軍の戦力は
今では練・南蛮の
三分の一以下…
怒りにまかせた
羅候の攻撃を
防ぎきれないでしょう

なれば
南帝閣の他
智の民に害が
及ばぬよう
無血開城するより
ほかないのです…

無血開城…

そうですね
智の国を
火の海には
したくありません

けど…

いつか我々は
また南帝閣に
もどって
これますね

はいっ！

この正宗！

必ずや…
陛下を南帝閣…
いや全銀河の
帝位に
おつけいたします!!

正宗の奴…
これから
どうするつもりだ…

殿
智を
いかが
いたしますか？

無論
権力の空白地を
つくるつもりは
ない！
すみやかに
軍勢を派遣して
占領してしまえ！

ははっ!!

ただし
流血は
絶対に
避けるように
には！

こころえました！

殿
それにもう
ひとつ

なんだ？
まだ何か
あるのか？

邑峻様の
お側に
お行きになって
ください

もう
よろしい
でしょう

!!

バカヤロ――ッ!!
んなこと
おまえが
いちいち
心配するな!!

ははは
いらざる
口出しで
ございました

そこまで
いうんなら
ちょっと
様子を
のぞいてくる!

な――に
首吊ってる
わけじゃ
あるまいしよ!

……

さて…

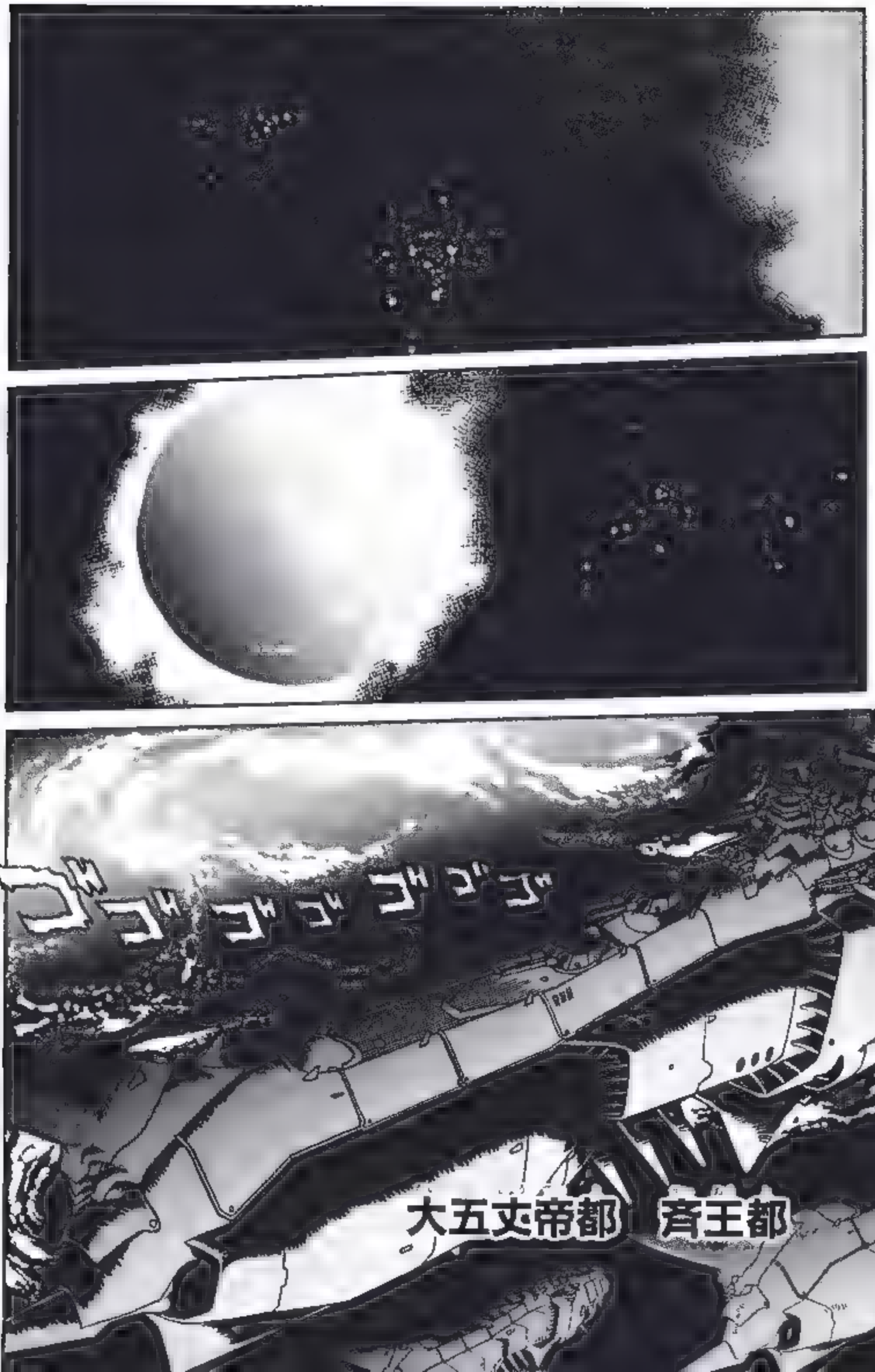
たかが
南大統一が
何と
遠いことよ…

ましてや
銀河統一など
果てしない
夢なのかもしれん…

たが
俺は命の
続く限り
統一候様を
覇者にする…

おまえは
山宗と
共に行くのか
飛竜…

おれと
同じ夢を
見続けている
だけかも
しれぬのにな…


大五丈帝都
斉王都

激しい
攻防戦のすえ
陥落した斉王都は
七日七晩
燃え続けた
骸羅王朝の居城
武安宮の
火災も収まり

今も静寂の中にあった

ん？

雷！
何をしてる

おう
師真、

もう寝てた
もんだと
思ってたぞ

あ――
寝てたんだけど
ちょっとな

それより
おまえこそ
どーした？

何か用が
あったのか？

うむ……
別に明日でも
よかったんだが
たった今
南天の動きに
ついての報せが
あってな

ほ――

あまり
いい話じゃないぞ

正宗が
動いたか？

え？
なぜ知ってる？

いや……
何でって……
そんな気配が
してな

け
気配って…なあ…
おまえ……
何万海里と
離れてんだぞ！

そうか――
独眼竜め
あのまま
おとなしくしてる
わけねーよな

あ
まさか
おまえ
目が覚めたってのは
その気配でか！

正宗に
起こされ
ちまった

紫紋には
内緒だぞ
あれでも正宗は
女だからな

ケダモンか
この男は

……で
その後
正宗は
どーし…

わっ

もういい
詳しい事は
明日話すよ！

……ったく
あきれた奴だぜ

とにかく
早く
寝ろよ

明日から
やることは山ほど
あるからな！

わかった
わかった

やれやれ
山賊いって
時々わかんなく
なるな
雷のような
種類の人間は

そーいや臭いで
山賊の船跡を
見つけたってのも
孟閑から
聞いたなぁ

その時は
笑い話程度に
聞いてたが……

こういう乱世の
世の中だ
法や理論じゃ
説明できない
連中もいるって
ことだ

たくさん
いろいろ勉強
させられるぜ

骸羅を倒して
一週間後
雷による
実質的な
五丈統治が
始まった

そのような
苦しい状態の中で
共に戦った
諸侯・将兵たちに
公平な論功行賞を
行わなければ
ならなかった

また
突如参戦してきた
玄偉と西羌王の
取り扱いも
捨て置けぬ
問題であり

事実
進駐してきた
西羌軍との
トラブルも
二、三
起きていた

激闘の60日間の後
雷が手にしたのは
このように
疲弊しつくした
大国・五丈であった

雷は内にこれだけの
問題を抱え
外には虎視眈々と
五丈侵攻を
企む南天軍に
対処しなければ
ならなかった

我々には
一つたりとも
誤りは許されない

師真はここで
優れた行政官で
あることを示した

彼は初めから
大風呂敷を広げる
というミスは避けた

全局を視野に収めつつ
優先順位を
はっきりさせ
一つ一つ解決していった

それを
副軍師
林則徐が
補佐する

まずは
全五丈を
完全に
掌握する
ことだ

こうして
敗残軍の
掃討には
経験豊かな
項羽を派遣し

鐘士元を
遣わして
領民を鎮撫して
治安維持を
図った

鐘

軍団の再編も急がれた

南京楼軍を基幹とし降伏した諸侯の軍勢を併せて8個軍団に再編する

その編成には林がそして再訓練は孟閣に任された

破綻した財政については強力な援軍が斉王都にやってきた

このたびはまことにおめでとうございます

三楽斎久しぶりだな南京楼はどうだ？紫紋たちは元気か？

はっつつがなくお暮らしでございます

連れていってくれとせがまれ大変でした

梁斎は
大覚屋英真を
初めとする
豪商からなる
経済官僚を
引き連れていた

兄さん
たいそう
ごりっぱに
なられて……

おまえこそ
大覚屋の主人
としての
風格がついて
きたな

財政の再建は
このスタッフに
よって
討議された

戦時国債を
発行し
諸将・人民の
資産に応じて
購入を義務づけ
ましょう

しかし
人民は
ただでさえ
戦時下の重税に
あえいでいるぞ
そのうえ
国債となると
負担が大きすぎや
しないか？

総じて
民衆は税の
重さうんぬんより
その不公平さに
怒りを感じます

まずは上の者から
その実例を示し
不正を図る者には
厳罰を下し
また
暴利をむさぼる役人を
排除しましょう

かたじけない
英真殿
これからも
おのおの方と共に
よろしく頼む

ははっ
ありがたき
お言葉

三楽斎
今までの
統治機構は
役にたたん
何かいい策は
ないか

はっ
そう思って
一案考えて
まいりました

吏・戸・礼・
兵・刑・工の六部
からなる
尚書省（内閣）を
おきまする

それぞれの
長官にあたる尚書に
次官にあたる
右僕射・左僕射をつけ
管理させましょう

そして
その尚書を
統べる者として
尚書令を
頭にすえれば
よろしいかと
思いまする

ふむ……
つまり
行政の親分って
とこか

三楽斎
本日をもって
南京楼
留守居役を
解く

は……
はあ？

おまえは
今日から
その尚書令だ
頼むぞ！

な……
なんと……!!

お…お待ち
ください
それがしは
一留守居役

そのような
破格な出世に
応じた手柄は
立てておりません

謙そんするな
南京楼を守り
羅候を退け
補給は河の
流れるごとく
だった

このたびの
偽帝討伐の
第一の功は
おまえにあると
思っている

これからも俺の片腕として新しい国家を造ってくれ

ははあっ!!

この三楽斎一身をかけておつくし申しあげます!!

ところで三楽斎練の動きをどう見る?

今は正宗の去った後の智の占領に大わらわの様子しばらくは動けますまい

だが我が五丈を討つのなら今が好機!

ほどなく国境を侵しましょう

今練に攻められては俺たちはひとたまりもないとうする?

おまかせを再度それがしを練にお遣わしくだされ

以前
次に訪れる時は
麒麟を持参すると
いったそうだな

捕らえたか？

はい
首尾よく

この城下に
ございまする

……

こうして
徐々にでは
あるが
五丈は
その国力を
回復していった

なあ
師真

ようやく
形だけは
整ってきたが
後は何が必要だ？

そりゃもう
人だな
人に限る！

優れた人材
なくして
国は動かん
ましてや
五丈は大国
その大国を効率よく
動かすためには
よほどの人材が
必要だ

けど
それほどの奴が
まだいるのか？
五丈の旧臣の
中から
捜し出すのか？

いいや
五丈の旧臣は
役に立つまい
才あり志ある者は
とっくに骸羅の許から
逃げ出しているだろう

旧臣どもは
その職を解き
若干の美田を与え
地方もしくは
名誉職への
隠居を申し渡せばいい

我々は
野に下っていった
人間を呼び
集めよう

その連中を
首尾よく
召しかかえ
られるかな

将軍の若さに
何か新しいものを
感じる者ならば
たやすいと
思うがな

ん？

将軍！

先の右大臣の
西豹が会いたいと
言ってきたそうだ

ふ――ん
西豹ってのは
五丈旧臣の
中では大物だ

さしずめ
自分たちの
先行きが
不安になったん
だろ

お初に
お目にかかります
西豹と申します

西豹殿
俺に何かあると
聞いたが

何用かな?

はい
これを
お納め
ください

これは…

この宮殿より
遠ざけておいた
者たちの名で
ございます

彼らは
大帝の悪政を憎み
または疎まれ
野に下った者たち
でございます

彼らには
身を正して
時を待てと
申しつけておりました

今が
その時と
存じます

将軍には
なにとぞ
彼らを登用
なさってくだされ

おお
それはありがたい
優れた人物なら
のどから手が出る
ほど欲しいと
思っていたところだ

それに
東河の七賢人を
招き入れるよう
おすすめ
いたします

東河
七賢人？

何者か？

…

彼らは処士（学識者で
あるが士官を求めない者）
でございます

東河の地に
隠棲しておりますが
天下のために
彼らを重用なされば
大いなる益が
ございましょう

師真！

うむ
いいことを
教えて
もらったな

どうだ
西豹殿も
天下の大業に
手を貸しては
くださらぬか

ありがたき
お言葉
いたみいります

なれど
我々は大帝の
臣下でありました
その悪行の責任は
我々にもあります

民の怨嗟の声は
身にしみて
おります

今
紹介した
人物は我々旧臣の
万倍の才能の
持ち主

我々に代わり
将軍の大業を
お助けしましょう

それでは…

ふむ……
「人ある所に
人なく
人なき所に
人あり」とは
よく言ったものだ

ああ……

東河

何
わしを召したいと？

ふふ
兵馬をもって
有頂天になった
若僧がか……!!

わしは
世捨て人
俗世のことは
わからぬ

さっさと
帰るよう
伝えい

七賢人の一人 如晦

なに？

それが
竜我将軍
自ら参って
おられます

むっ

それがし
五丈鎮南将軍
竜我雷と申す者

ご老爺の
ご出馬を
お願いに参りました

……

なにとぞ
若輩の
それがしを指導し
しかってくだされ

将軍
お手を
お上げくだされ

天下の大業を
なさろうとされる
お方が
この貧乏学者に
どうして
そう頭を下げなさる

みっとものう
ございまするぞ
仮にも
将軍では
ござらぬか！

たしかに
それがし
将軍では
ございますが

元々は兵卒
中隊長ぐらいが
似合いです

だが
運よく多くの
人と出会い
ここまで
やってこれました

天下の大業を
なすからには
さらに有徳の師に
教えを受けたいと
思います

師と呼ぶからには
礼をつくすのです

ふむう
野心家ではあるか
卑しい野心家では
ないようだな

わしも
ここで
朽ちる気はない

わかりました
とにかく中で
将軍のお志を
うかがいましょう

この男に
賭けてみるか……

雷は
そこで自らの
生きる覇者の
道を如晦に
話した

如晦も
雷の強い志に
惹かれるものが
あった

わかりました
将軍の思い
この胸に
重く響き
ました

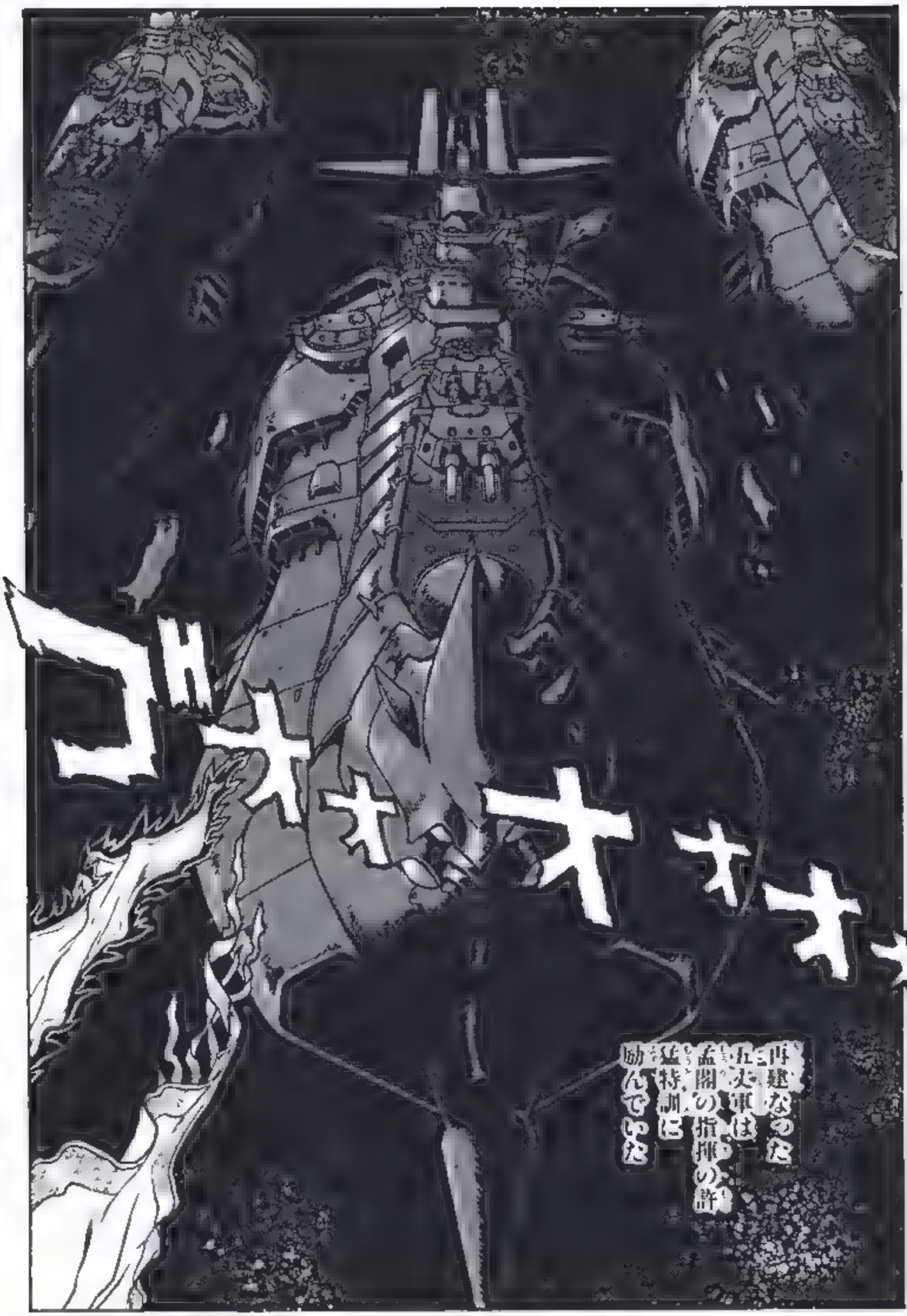
お見捨てなくば
尽力しましょう

この取るに足らぬ
老人のために
自らのお迎え
感謝いたします

こちらこそ
先生をお迎え
できて
百万の味方を
得たようです

やがて
他の六人も
如晦が見込んだ
人物ということで
需の招きに
応じた

こうして
強力な軍隊に
有力な頭脳集団が
加わったのである


ゴオオオオオオ
再建なのだ
五大軍は
孟閑の指揮の許
猛特訓に
励んでいた

当時の海戦は
大戦艦と
重装海兵団を
中心とした
機動戦であった
砲撃により
敵艦を痛打し
たがいに
有利な位置と
局面を作り
頃合を見計らって
突撃・接近

鎧えら折れよと
ばかりに
人体を食い込ませる
戦場と化し
重装海兵隊が数次
死に
神様、まるで
これでおしまいであろう

今

このような戦いは
機に応じて
旗艦が掲げる
信号旗・信号灯に
艦隊がいかに
一糸乱れず従えるかに
かかっている

戦闘序列としての
梯陣
敵を包み込むように
散開して横陣

旗艦を先頭に
突撃態勢である
楔陣

そして
遊撃戦としての
単縦陣

それをとってでも
指揮官の合図に
一挙手一投足従って
初めて勝利に
つながるのであった

先程から
右翼の動きが
緩慢ですね

孟閣殿
あの艦隊の
指揮官は
誰ですか？

あの旗印は
元王亭の
太守 楊華です

王亭の
太守…

新兵なら
いざ知らず
操船術も
心得ているはず…

あのような
だらけた動きは
解せませんね

林殿
楊軍は
この間の偽帝
討伐戦では
真っ先に
投降しましてな

その功を高く
買せられると
思っていた
そぶりが
ありますな

それが
思ったほどでは
なく……
なるほど
それで我々の
命に服するのも
馬鹿らしいと
いうわけですか

いけませんね

軍政司殿
この罪
どう裁きますか

はっ

楊軍の行動
詐真相の
軍紀によれば
明らかに反軍の
罪に当たります

軍政官 公孫（七賢人の一人）

その罪
死罪に相当
いたします

お待ちくだされ!!

副軍師殿!
楊華は三万五千もの兵を率いる大将
練と戦う前に味方の将を殺して何の利がありまする!

孟閣殿それは違います

軍師様が厳しい軍紀を定めたのはただ罰するためではございません

え?

我が五丈軍はいわば寄せ集めの軍隊

それらを一つにまとめるために軍紀という法が必要なのです

五丈

いわば軍隊が身体ならば軍紀はその心!
その心がくらついたとあらばとても天下統一などおよびません

もっともです

練も
そして
流軍になった
とはいえ
正宗も
恐るべき
相手です

すでに練は
超弩級戦艦
帝虎級の
大量建造に
入ったとか…

質・量ともに
優る敵を相手に
罪を犯した者の
地位にこだわっては
大局を誤ります

確かに…

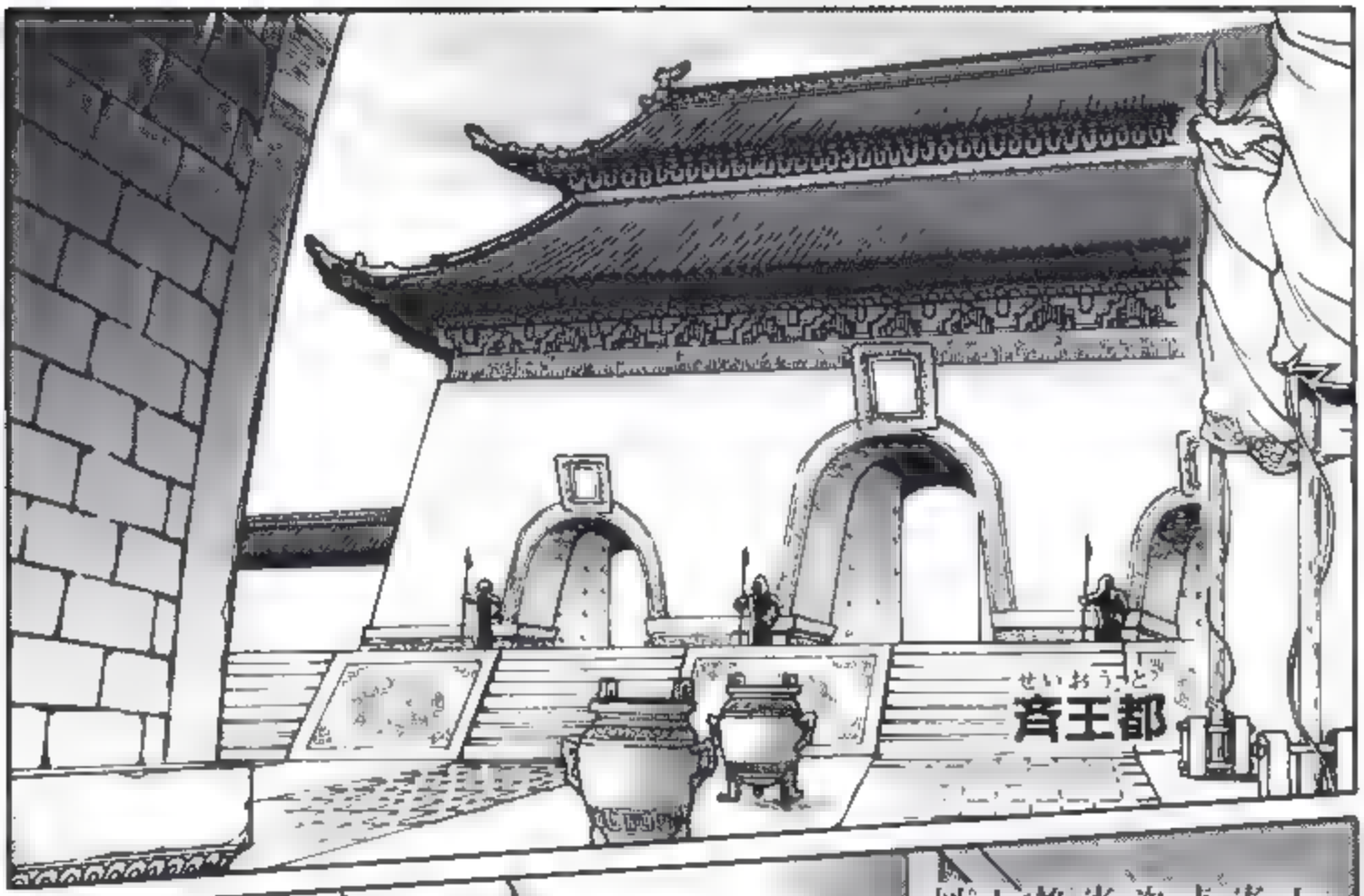
わしの考えが
甘かった…

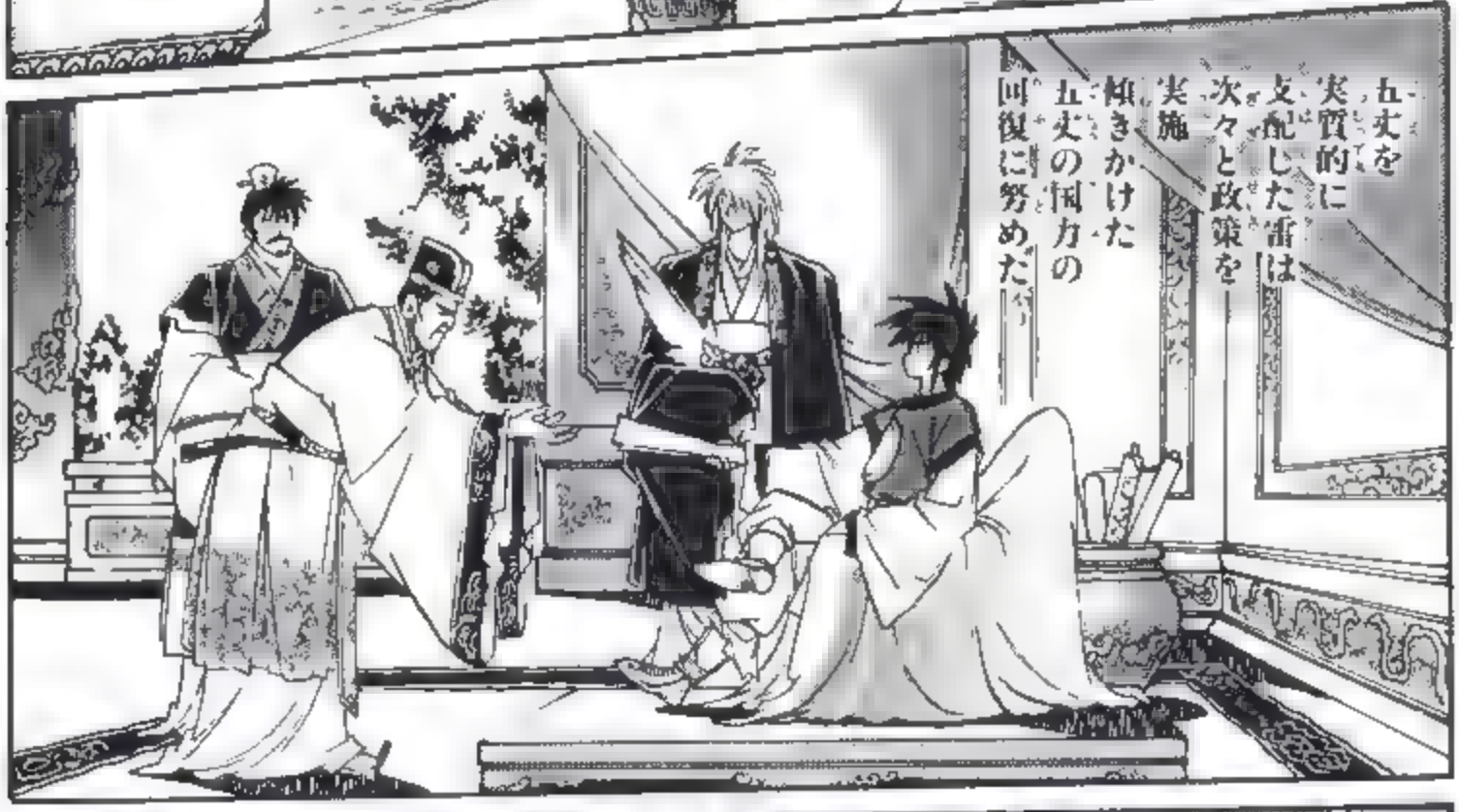
左回頭四五！
針路一七〇で
舵をもどし
両舷全速!!

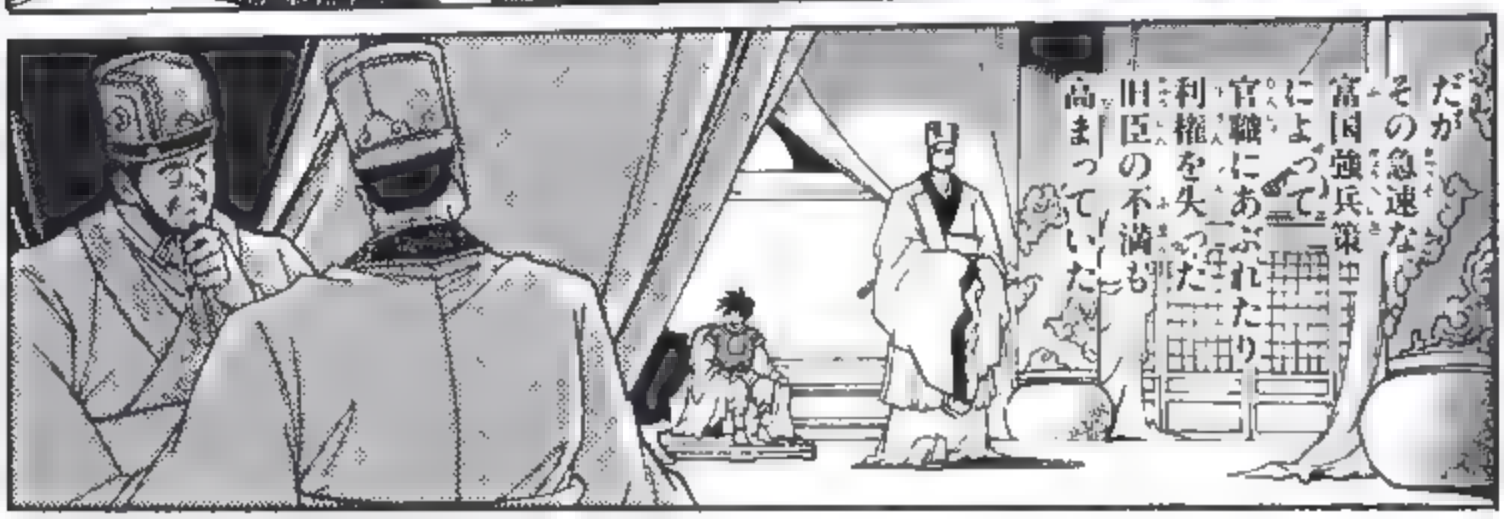
金剛のマストに赤旗！軍紀違反により処刑を示す旗が掲げられた！

ドドド

兵法にも
内に主君を畏れる
者あらば
必ず勝利するとも
あります
来たるべき
大戦争のためにも
法による
最強の軍隊を
創らねばならない


斉王都


五丈を
実質的に
支配した雷は
次々と政策を
実施
傾きかけた
五丈の国力の
回復に努めた
回復
実施
支配
実質
五丈


だが
その急速な
富国強兵策
によって
官職にあぶれたり
利権を失った
旧臣の不満も
高まっていた

彼らが
真っ先に
頼ったのは
玄偉であった

彼らにとって
玄偉は
雷とは違って
長年共に
弾正に仕えた
旧知の仲

四天王の一人であった
玄偉は
雷に対抗できる
唯一の人物と
されていた

重臣の方々の
ご不満
よくわかりました

竜我殿の
専横ぶりは
耳に入って
ござる

各々方に
会わせたい方が
おり申す

なんと!!

それでは
竜我殿は
我々に早々に
国許へ帰れと
申すのか!!

そういうことだ

秦嘉殿
ここには
西兗・五丈
合わせて
百万以上の
兵がいる

衰弱した
五丈では
彼らの滞陣に
必要な食料を
とてもまかない
きれない

故に
引き揚げて
もらいたいと
申しているのだ

なれど
わしは三十万の
軍勢を興して
貴公の進撃を
助けた

こうして
戦いに勝ったからには
従った兵士の労に報いる
恩賞を承りたい！

ガラン

そうは
申されても
見ての通り
五丈の国庫は
空っぽゆえ
なんだよな

何たる
言いぐさ!!

そんなことで
我が兵士が
納得すると
お思いか!!

待たれい
楽鳥殿

この度の
偽帝討伐は
民のため
暴を取り除くという
大義のためである

そなた
まさか恩賞
目当てだと
申されるのでは
あるまいな

だが
竜我殿は
五丈を手に
したでは
ないか!!

まあまあ
お二人共
お待ちなさい

秦鳳殿の
国王としての
立場も
わかっております

どうでしょうかな
貴国との国境を
解放し
友好国として
お付き合いを
するというのは

交易により
財もなし
また国境での
軍事の負担も
軽くなります

人民は喜び
王を明主
として
称えましょう

ふ…
ふざけるな!!

そのような
詭弁
聞く耳
持たぬわ!!

何が
国境を開放
するだ!
人を馬鹿に
しおって!!

竜我よ!
これだけは
覚えて
おけ!!

天下はまだ
誰のものでも
ないって
ことをな!!

ふん!!

やれやれ…
欲の皮の
突っ張った
男だな

……

師匠(しょう)!

俺(おれ)は
偽帝(ぎてい)を倒(たお)し
五丈(ごじょう)を平(たい)げた
また伝国(でんこく)の
玉璽(ぎょくじ)も
手中(しゅちゅう)にある

国力(こくりょく)も回復(かいふく)
しつつある今(いま)
ここで五丈王(ごじょうおう)を
宣(せん)したいが
どうだ?

主人(しゅじん)なくして
国(くに)は成(な)り立(た)ち
ませぬ

将軍(しょうぐん)の功(こう)は高(たか)く
五丈王(ごじょうおう)を宣(せん)しても
問題(もんだい)はありません

皆は
どう
思うか

結構な
ことに
ございます

将軍が
王位についてこそ
臣下も
働きがいが
ございます

覇権を握った
者こそが
統治者で
ござる

将軍は
直ちに王位に
就き
民心を
安堵なされ
ますよう…

うむ…

だが
王位に就くに
あたって
二つ問題が
ある

と申しますと…

一つは
五丈は
言うまでもなく
弾正公の
建てられた国

臣下が王位を
奪することは
僭上と言われる
だろうな

もう一つは
玄偉だ！

奴が今になって
現れたのは
間違っても
俺の臣下に
なるためではない

何か切り札を
以って
俺と五丈の
覇権を
争うつもりだ

将軍
ご心配は
いりませぬ

おう
如晦

昔から
易姓革命と
いう言葉が
ございます

つまり姓が易るは
命 すなわち
天命が革ると
いうこと

曽よりこう申して劉備は禅譲されてまいりました

弾正公への義は義！しかしながら義に縛られては天命に背くことになりましょう

そうかならば玄徳はどうする

あの男が将軍と劉備を争うからにはそれだけの力を持っているということてす

一つは敵陣を討ち取った功……もう一つは西羌軍の支援

ですがこれだけではまだ不十分…

ては何だ最後の切り札は！

心配なさるな道中の出方を見て応しましょう

それよりもっと重要なことがあります

この機に乗じて
玄偉とその一派…
またはそれに
くみする旧臣共を
一気に抹殺
すべきと
心得ます

玄偉をか…

はい
将軍
奴を除く
機会はそう
ありますまい
機を失っては
なりませんぞ

あの男…
戦場で討ち
取れる筈では
ないからな

俺の天下を
盤石にする
ためにも
奴には消えて
もらうしかない…！

まったく
おもしろくない！
わしを子供扱い
しおって…!!
あの成り上がり者が!!

ほんの少し
前までは
ただの雑兵では
ないか！

玄像殿より
伝言が
ございます

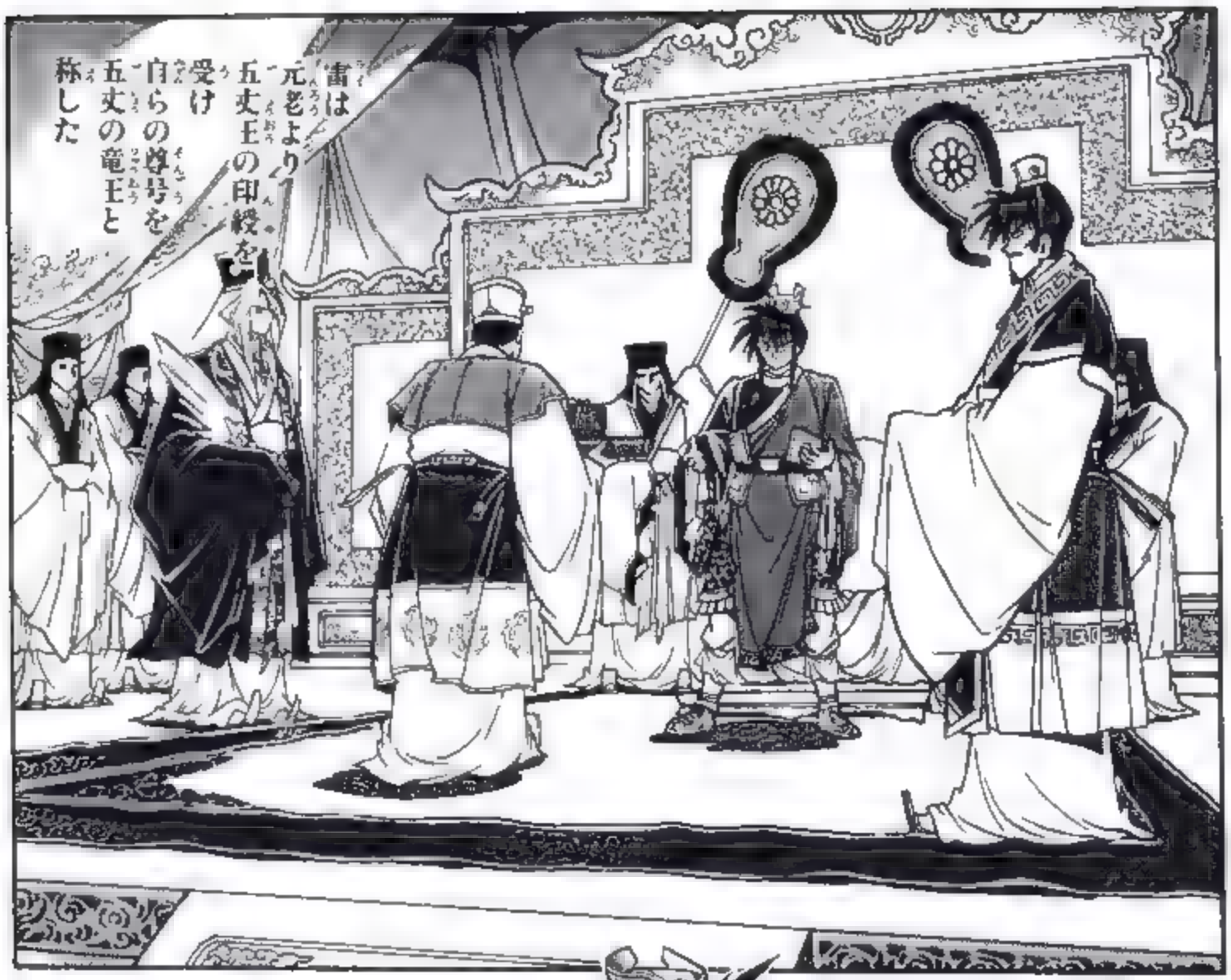
おおっ
玄像殿は
いかに
お考えなのか!!

……

うむ
うむ…

なるほど…

それから
間もなく
高は
吉日を選び
文武百官の前で
五史上に
即位したことを
宣言しました


崇は
元老より
五丈王の印綬を
受け
自らの尊号を
五丈の竜王と
称した

旧帝国左将軍で
あった比紀弾正が
建てた五丈国は
二度 七君を代え
今 若き新国王を
迎えたのである

さらに
大覚屋師真を
丞相兼
軍師将軍に

林則嘉を
軍師中郎将

孟開を
大将軍に用い
全軍を統帥
させた

その他
苦難を共に
してきた
諸将にも
それぞれ
昇進・恩賞の
沙汰があり
新しい官位が
与えられたのである

かくして
高
一
人事を
一新した
年号を安康元年と
改め大赦を出した
即位の大典を
おえた新王は
百官の拝賀を受け
その由を全国に
公表した
一
と
生死を共にしてきた
将兵の喜びは
大きなものであった

皆が喜んでくれているよかったぜ

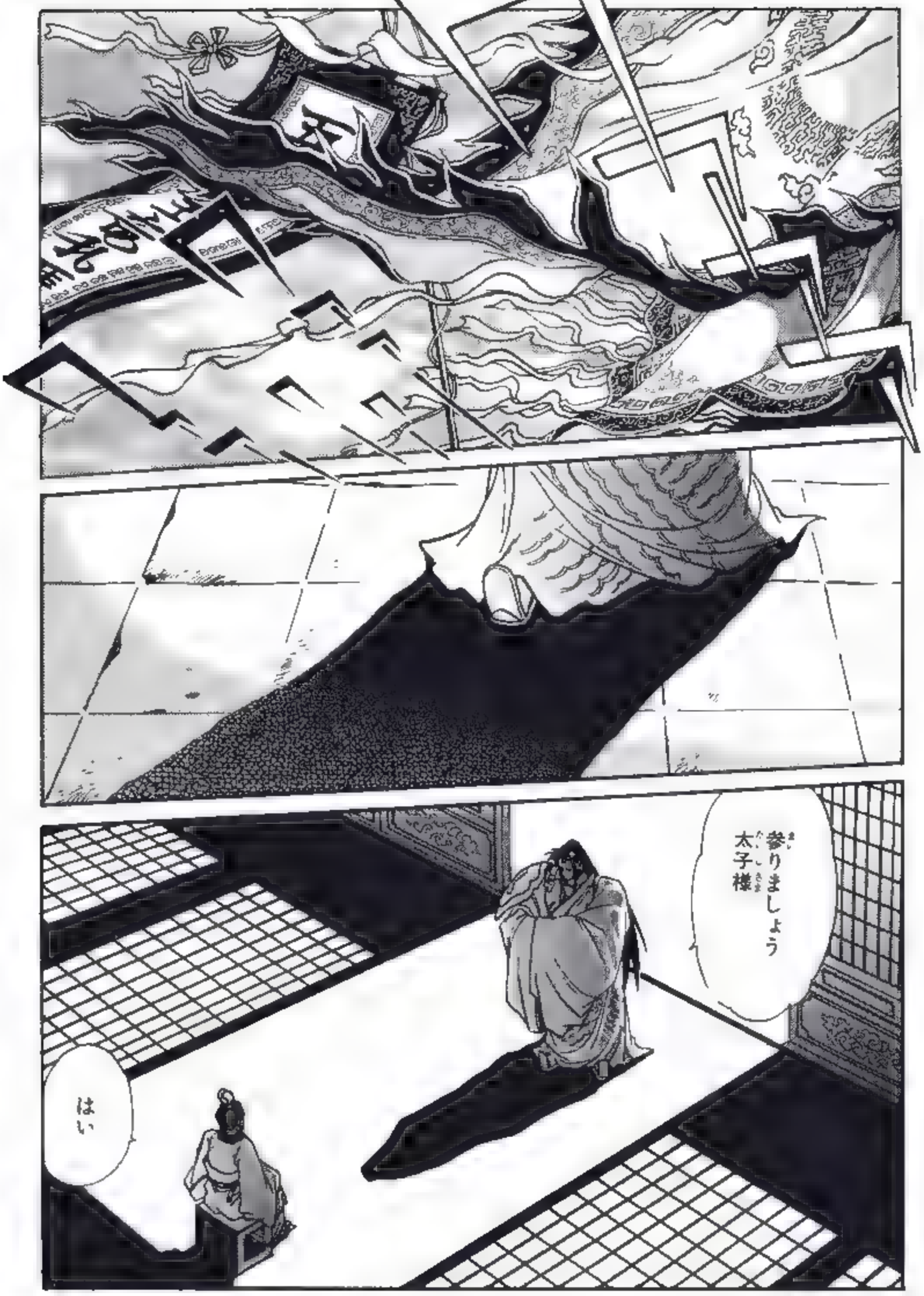
ああ

だが今ようやく正宗や羅候と同じスタートラインに着いたんだ

お忘れにならぬように…

もちろんだ俺はあの二人と共に天をいただくつもりはない！

これからが本当の戦いだ！


参りましょう
太子様
はい

何？
俺に
詰問したい
だと！

かように
玄偉殿他
数名の旧臣が
申しております

いやはや
詰問とは
おだやかでは
ございませぬな

何を
バカげたことを!!

元帥府は
廃止！
奴は退役させた
はずだ！
目通り
まかりならん！

まあ
まあ
諸君
お静かに！

恐らく
我が主君の即位に
何やら難癖を
つけにきたの
でしょうが

臨機応変に
応じれば
問題はない
ご案じなされるな

竜我殿に
申し上げたき
ことがござる

お控え
なされ
玄偉殿！

竜我陛下で
ございますぞ!!

王ですと？

どなたが
ですかな…!!

無礼な！
ここにおわす
竜我様こそ
五丈王で
ござるぞ!!

わかれば
早々に
平伏なされ！

何が
おかしい
玄偉！

偽帝の
後には
偽王で
ござるか

それがしが
平伏するは
真の君主のみ！
冠をかぶった
賊では
ござらん！

俺を
賊と
言うのか…!!

左様!!
いかに体裁を
繕っても
所詮は
偽王

この玄偉
亡き弾正公の
ためにも
賊の化けの皮を
剝いでみせま
しょうぞ!!

何だとぉ…!!

きさまーっ!!
言わせておけば
勝手なことを
ぬかしやがって!!
覚悟は
できてるん
だろうな!

落ち着きなされ
陛下

この場は
俺にまかせろ
奴の考え
くらい
読んでいる

う…!!

元璋様を
これへ!!

はい

元璋?

何者だ?

ガシャ
ガシャ
ガシャ
チャ…
元璋様でございます！

何者か!?

比紀弾正公の
弟君
弾興が孫
弾尚の子で
ございます

すなわち
弾正公の
ただ一人の
お身内で
ござる!

何だと!!

バカな…!!
弾正公のお身内は
戦乱の初期に
朝廷において
三族皆殺しと
聞いておったが…

ここに
系譜と
弾正公の
直筆による
お手紙が
ある

改められよ

ここに
持ってこい!

先年
弾正公より
密命を帯び
この玄偉
そのお身柄を
託されて
おりました

五丈は
弾正公の
建てられた国!
その血筋の者が
引き継ぐのは
明白の理で
ござる!

一時の功により
王位を簒奪するとは
もってのほか!
人の道を
はずれて
よいものか!!

ガク
ガク…

師真
この弾正公の
手紙は
本物か？

花押は
よく似ているな
だがそんなことは
どうでもいいよ

これが
連中の切り札かい？
玄偉もまだ
俺の手の内に
あったか…

さあ
元璋陛下
どうぞ
玉座へ
お上りください

しかし…

何も
心配
ございません
この玄偉と
西羌兵が
陛下を
お守りします

さあ！
正統な
王位継承者に
道を
開けられい!!

竜我殿
そこをどきなされ
狼刃殿が知ったら
お怒り
なされますぞ！

くそうっ!!

陛下
お刀
お借りします
ぞ
!!
むっ!!
師真よ
それは
何のつもりだ!
賊の本性を
現したか!!

むん!!

玄偉よ
血など
今の世にどれだけの
重みがあろうか

どのような血筋も
鋼の刀を
防ぐことなど
できまい

全ては
この鋼によって
決するのだ
血など人の道
などぬかすは
所詮
平和ボケよ!

だが
天命持つ者は
鋼の刀すら
避けて通る
そうな

試してみよう
じゃないか

生憎
俺は血だとか
家系なんぞとは
縁もゆかりもない
辺境の生まれ！

人の道など
知ったこと
ではないわ!!

——なんということを…

陛下
賊は討ち取りました
お刀をお返しいたします

……
見事だ師真！

お誉めにあずかり光栄でございます

よいか皆の者！

この五丈は
全銀河の要となる
大国である！

全銀河統一の
大業は間違いなく
五丈が成し遂げる
のだ！

弾正公は
天下のために
惨を払い
威武強大にして
人は皆
畏れ平伏した

弾正公の
目指したものは
"覇"である！

その昔
弾正公が
正宗に天下を
譲ろうとしたのも
"覇"を正宗に
求めたからでは
なかったか

太平の世なら
ともかく
戦国の世では
この五丈を継ぐのは
血縁などではなく
"覇"の持ち主で
あろう

罪こそ脱ぐ大弾正公の
罪は重し保身を図ったり上げ
い！

そして玄俤よ！
同じそしりも
罪だ!!

私が
のと申し元譲を
め
である
は

源誤らす天国を掠る
だからだ！

玄俤よ！

その元譲とやらが
"覇"の持ち主か！

譲弾正公の
みにこう！
国それこそ
り渡すことになり
を敵に
思い

"覇"を争えるのか!!
"練"五王となって
"智"と
このような男が
支が治まるのか！

玄偉！

おまえを斬る!!

くっくっくっ

何を笑う玄偉！

気でもふれたか！

はは

はは

おもしろい…

!!

見事だ…
大覚屋師真…

そして
竜我雷よ…

おぬしたち二人…
気に入ったぞ

これは
ほんの
挨拶代わりだ…

次に会う時は
二人共
私のものに
してやろう…

ヒュウ

ビュウ

何いっ！

ではまた
いずれ…

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

き…
消えた!!

ふん…

奴め
妖術か幻術かを
たしなんでいる
ようだな

それにしても
泥人形とはな…

これも
幻術ってやつか

玄偉の奴め…
我々を試したか…

少し甘く
見ていたな
奴を…

剣を収められよ
西羌王よ!!

貴公らは玄偉に
いいように
利用された
だけだ!

五丈と西羌
相争う理由は
ないはずだぞ!!

……

だ…
黙れ
黙れ!

覇を目指す
者がこの五丈を
得ることが
できると言うのの
なら…

このわしにも
資格はある!!

竜我よ!
きさまだけの
天下ではないわ!!

それっ!!
秦

西光軍が
城内に侵入
いたしました!!

なんだと!!

わはは
きさまの命運も
これまでよ!

この
成り上がり者が!!
大口たたきおって!
その首 城門に
さらしてくれるわ!
かかれ!!

師真!
さがってろ!!

待て待て
待てぇ――っ!!

おおかみらの
相手は
俺がソレなの!!

項武!!

へへっ
ご安心を!
電王様には
指一本触れさせや
しませんぜ!!

七星

雲海〃

加勢に
来たぜ〃

雲海！
玉間殿と
一緒に
重臣の連中を
頼む〃

がってん〃

ひるむな！
竜我を
斬れ!!
天下は
目の前だぞ!!

うわっ

うわっ

三条斉輝
伏せて!!

おお
大助殿!

撃てぇ——っ!!

ひぃっ!!

っいくや！

ひゅ――……

太助殿
早く竜王様の
許へ!!

まかし
といて!!

天下は
西光王の
ものになる
のだ！

五丈の奴らは
皆殺しだ!!

ぐおっ!!

きゃあっ!!

たわけ共が!

きさまらなんぞにこの五丈を踏み荒らされてたまるか!!

西光の片田舎にても引っ込んでおれ!!

雄士元！
おおっ 軍師殿！
兵を連れて 私と一緒に 来てくれ！
はっ？ どこへ？
玄徳の首心 華玉を捕えに いくのだ
ただし 乱暴は 許さんぞ
いい女 なんだから
へえ へえ

女！
動くな!!

華玉よ
玄偉は
風を食らって
逃走したぞ
観念するんだな

おとなしく
してくれれば
賊の部下とはいえ
悪いようには
しないぜ

あんな
幻術使いより
俺の方がいいと
思わんか？

ふ…
笑止…

!!

消えた…!!

一体(いったい)どこへ…!?

くっ!

ああっ!!

ええい捜(さが)せ!捜(さが)せ!

……

また
会おうな
子猫ちゃん♡

最初は
勢いよく
城内に侵入し
西光軍では
おったが

項羽らの
懸命な防戦にあい
宮中に突入できず

ファ
ファ
ファ

さらに城外に
伏してあった
姚文の兵に背後を
攻められては
勝ち目はなかった

姚

たちまち
蹴散らされ
多くの兵が
投降した

くそうっ
兵はとうした!!

竜我は
袋の鼠だぞ!!

楽鳳!

!!

きさまも
覇を求めて
いるのなら
俺はきさまを
斬らねばならん！

天下人は
二人も
いらんからな!!

おもしろい！

この世は
力で決まるのだ
勝負
受けよう!!

ひゅ!!

ぐおおっ!!

ひっ!

ひっひっ!!

きさまに
天下を渡すほど
俺は甘くねえぜ!!

ゴ

玄傳に何を
吹き込まれたのか
知らぬが…

ちっぽけな
奴よ…！

孟閧！
こいつを
金剛のマストに
掲げて
西光艦隊を
攻めろ!!

はは っ!!

あー
孟閧殿！

師真！

討ち取られた様ですな竜王様

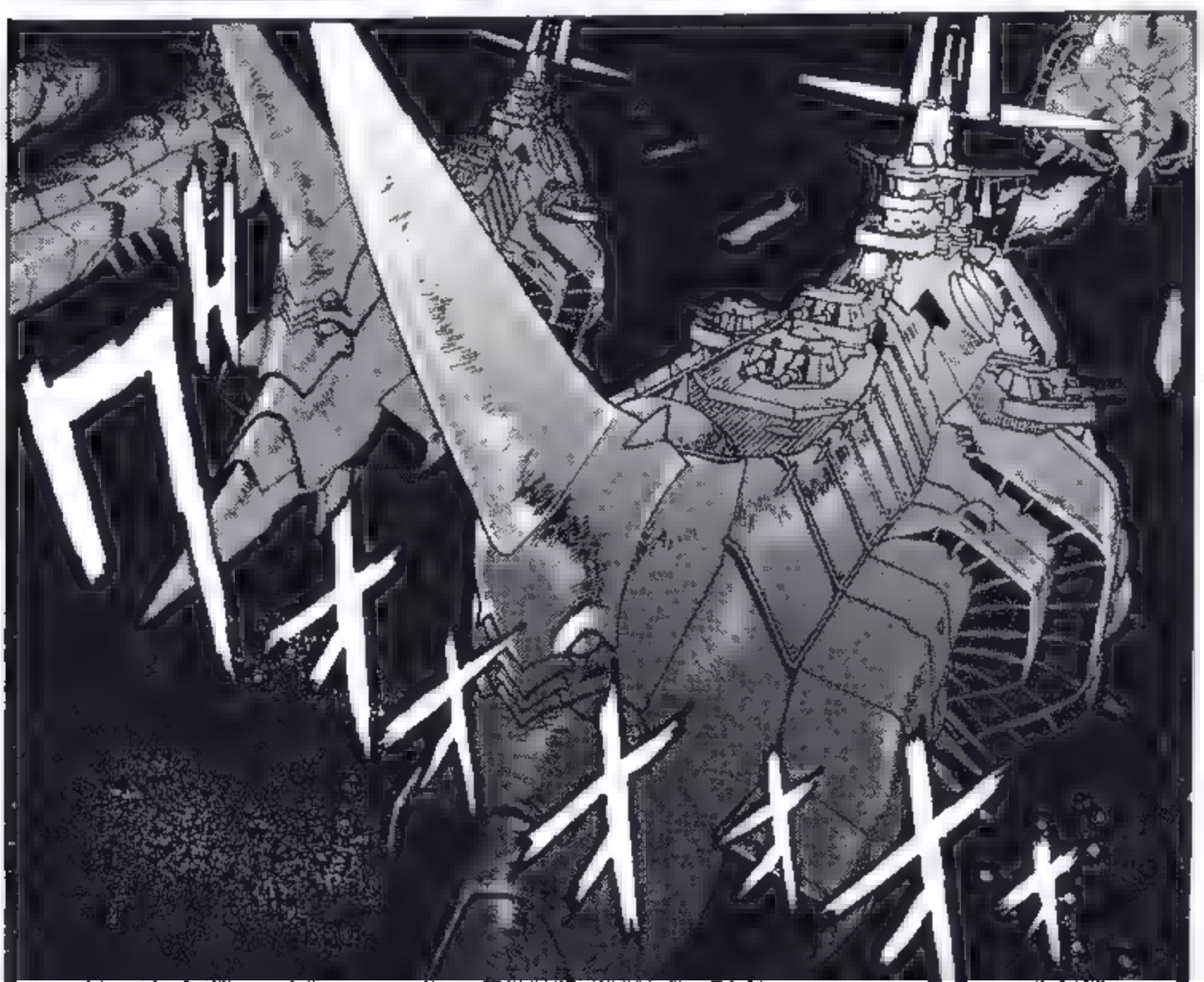
ああ首尾よくな

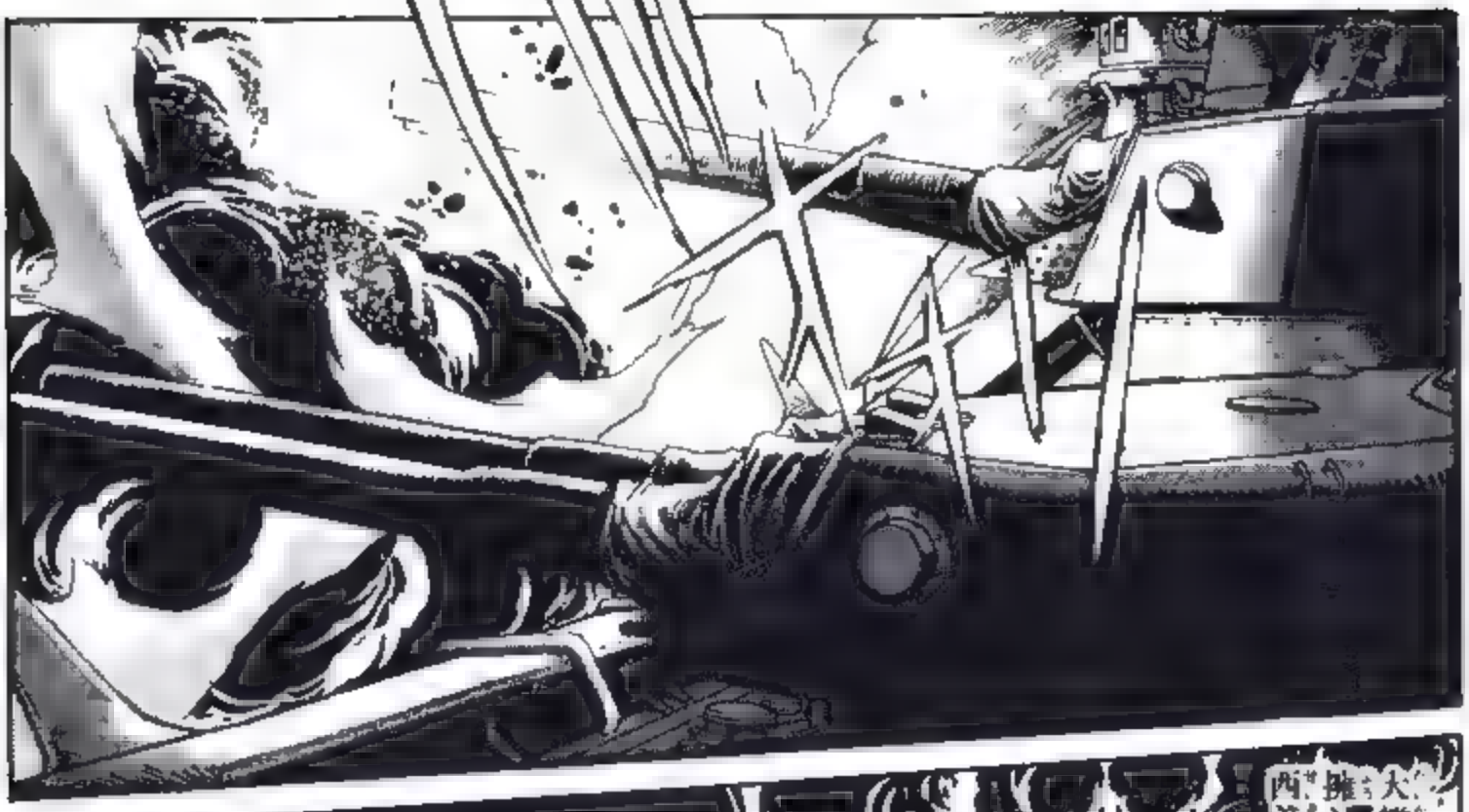
孟閣殿なるべく多くの艦を捕えるように

捕虜がほしい

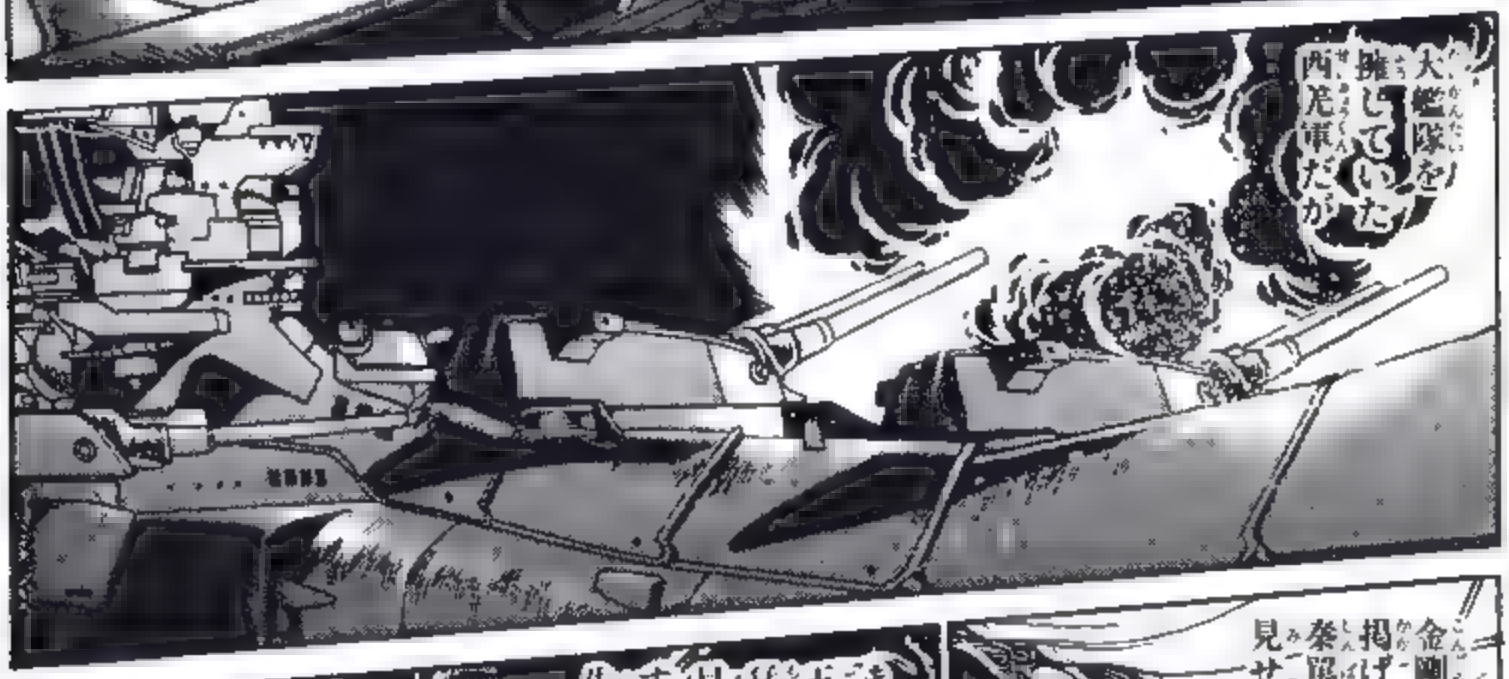
わかりました

それではただちに！

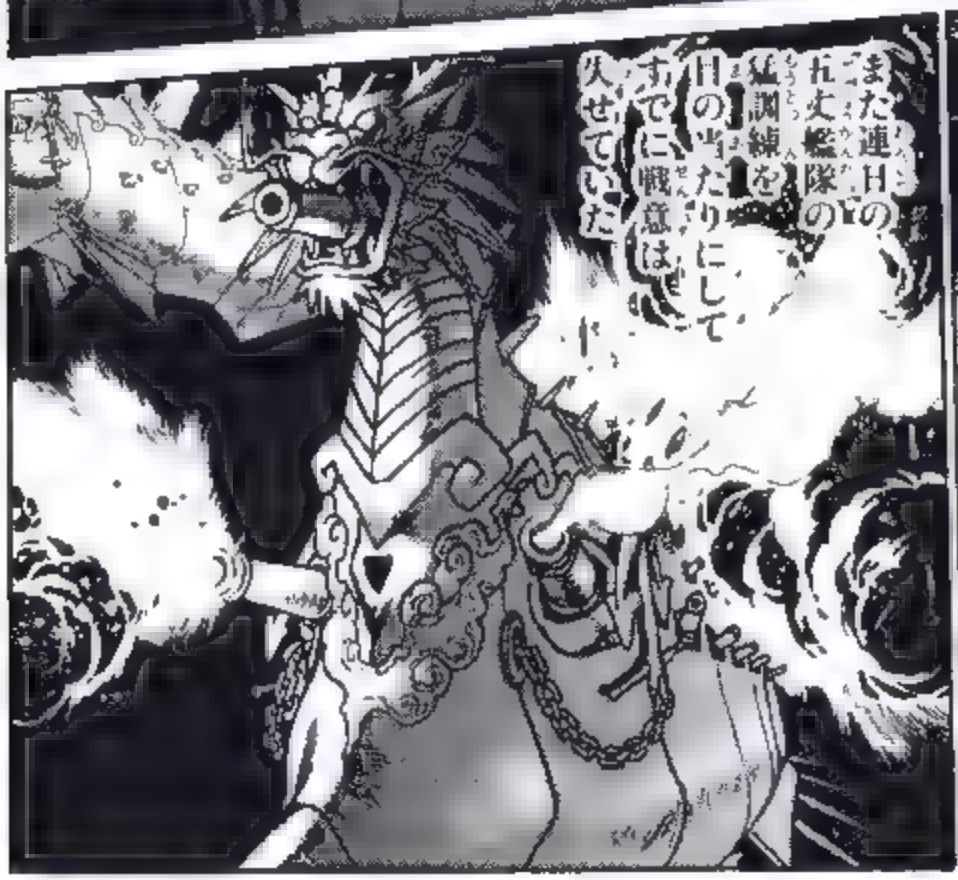




大艦隊を
擁していた
西羌軍だが



金剛のマストに
掲げられた
秦羅の首を
見せられ



また連日の
五丈艦隊の
猛訓練を
目の当たりにして
すでに戦意は
失せていた

西羌軍はたちまちのうちに四散し多くの投降兵を出しながらいっていで西方へ逃げた

捕虜となった西羌兵は来る西羌討伐の重要な情報源となるのだ

玄偉を
取り逃がしたのは
残念だったな

まっ
仕方がない
そいつは後の
お楽しみと
しておこう

しかしおまえが
いきなり
あの元瑋とやらに
斬りかかった時は
正直 俺も
驚いたぜ

偽者と
見抜いて
いたのか？

いいや

たとえあれが
弾正の実の息子
であっても
斬ったよ

ほー

言い切ったな

まあ偽者でよかったなこれでもう玄偉を信じる者もいないだろ

いや…世間には奴は本物だと公表する

そんなことは小さいことだ

雷我々の最大の敵は練・南蛮連合国だろ

？何でだよ

そんなことをすればまた旧臣の間に反逆の芽を生むことになるぞ

ああ羅候の奴だ

練・南蛮は辺境の地異民族と雑居し文化的に最も遅れた国だ

だがそれだけに純粋だ

純粋…？

伝統的な体制や
教えなどには
わずらわされない
人の道を説く者
もいない

あるのは
ただ権謀への
道のみ

蘇

普通を上げる
ことのみが
民が利を得る
手段なのだ

ひたすらに
民を戦場に
駆り立て
戦争遂行に
粉々と従わせる

驚くほど全体の
いい戦時機械だ

だが
それに
この五支国を見ろ

領土の中央に
位置し
神聖領河帝国の
領地でも
あったのだ

文化的水準が高く
どうしても
民は戦争以外の
ことに
興味を示す

そんな
二国が争ったら
どうなる？

普通った
領者が
血に飢えた
戦闘兵と
戦うんだぞ

勝ち目はない…か

元璋を
斬ったことを
公表するのは
民に五丈で
利を得る
ためには
血縁や生まれ
じゃなく

戦功のみで
あることを
認識させる
ためってことさ

その代表が
雷
おまえ自身だろ

ふっ…

国家が…
民が死力を
尽くさないと
天下は取れん…

今 必要なのは
名君じゃない
民や兵士に
最大限の
力を発揮
させられる
絶対権力者だ

わかった！

そいつは俺の仕事だ

頼むぜ竜王陛下

はは

林「…」

あ
師真様

今、西光兵の捕虜の尋問が終わりました

ご苦労だったな
それで？

おもしろいことがわかりました

実は…

ふむ…

なるほどな…

ならば
問題なく
かたづく…

あと
こちらが
西羌の人口や
産物などを
記した
資料です

いや
天然資源の
宝庫ですね

その資源を
有効に
使わせてもらわ
なくてはな

戦後処理の方が
たいへんだ

おまえの
意見を
聞かせてくれ

はい

まず
全土占領は
不可能です
西羌は懐深く
また昔から
中央との対立を
続けていた
歴史を見ても
明らかです

占領軍を
置けば
土着の民と
よけいな
トラブルが
生じましょう
賢明とは
いえません

西羌

しからば
有力者を…
この場合西羌王の
跡取りですが
その者を
心服させ
有力な同盟国
として存続
させるのが
いちばんだと
思います

同感だ…

問題は
対等の立場である
そいつを いかに
服従させるかと
いうことだな

いいだろ
明日にでも
陛下に
西羌討伐の
計画を申し上げ
準備を進めよう

はい

そろそろ
秦嘉を
討ち取った報が
伝わっている
だろう
動きが
あるはずだ

だが
練も…
羅候も
黙っては
いませんよ

また三楽斎にひと働きしてもらうか

よくやってくれたな太助雲海

なーにたいしたことねぇさ

ほんとほんと

んでも兄き本当に王様になったんだね

すっごいなー尊敬しちゃうな

こら太助竜王陛下だぞ兄きはねーだろうが

バーカよせよ！

王様だ陛下だと言われると未だに身体がむずかゆくなるんだよ

あ…ご…ごめん竜王様

あっ
そうだ
五丈王に
なったんだから
姫様たちも
斉王都に
お呼びしようよ！

！

ふ――む
そーだな

ずいぶん
顔見てない
もんなー

天下人に
なったら
まずは跡取りを
作らにゃ
ならんぞ

多けりゃ
多い方が
いいしな

そんな
犬猫じゃ
あるまいし
ポンポン
作れるかって！

うんにゃ
そりゃ
おまえの
努力次第だ

けど
紫紋様が
来られるなら
麗羅様も
一緒って
ことだな

俺
あの姫さん
苦手だよー

はっはっは

こうして玄偉秦罵を退けた雷だが…

それと同時に西羌練共に大きな動きが見られたのである

ズズズズズズズズ

Dengeki Comics

銀河戦国群雄伝ライ ⑫

1995年10月25日 初版発行

著者 真鍋譲治

発行者 佐藤辰男

発行所 株式会社メディアワークス 〒101 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館 電話03-5281-5213(編集)

発売元 株式会社主婦の友社 〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9 電話03-3294-1130(営業)

装丁 朝倉哲也+design CREST

印刷・製本 共同印刷株式会社

©JOJI MANABE 1995

R本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

初出／月刊電撃コミックガオ！ '95年3月号—'95年7月号, '95年9月号 (メディアワークス刊)

ISBN4-07-303781-1 C0979

躍動する超大国
練・南蛮連合！

軍旗掲揚!!

若き君主 羅侯の許に
集う知将・猛将達！

俺に刃向かう
奴は
許さん…!!

王虎の
進水・就役により
帝虎級戦艦
十二隻体制は
完備し

十二個軍団
すべてに
一隻ずつの
配備が可能と
なりました

狙うは打倒 竜我雷！
目指すは全銀河統一!!

下巻

迫る 竜虎の対決！
全銀河の命運をかけて
今 激突する!!

銀河戦国群雄伝ライ 第13巻
咆虎昇龍編いよいよスタート!!!